

シンデレラ物語論攷

鈴木 満

〔初めに〕

論者は民話（＝昔話）を基として文人により物語に仕立てられたシンデレラ譚を主として取り上げ、これらを紹介、かつ、物語に投影された文化を理解するためできるだけ注を施してみた。こうした、口承文芸研究者にはおそらくほとんど不要ではあるうが、一般の方向にとってはけっこう新知識といった性質の解説がこの物語の分析にどれほど役立つかは分からない。とまれかくまれ、アンナ・ビルギッタ・ルートがいみじくも述べているように「物語の研究という題目に関しては、多くの異なった見解が提唱され得る」^①。もつとも、物語の全分野と生涯の研究、すなわち物語のあらゆる分野からの研究を第一義とした、すなわち、ある孤立した話型ではなく、一纏まりの、相互に関連ある話型を研究することが重要である、と強調して已まなかつたC・W・フォン・シドウからすれば、^②「シンデレラ物語」という一つの話型の、それも民話を素材とした物語を並べて些細な事項まであげつらつた小論は、莫迦げた、非実用的な作業に過ぎないかも知れない。しかし、的外れでちっぽけな努力もひよつとして獅子に

対する小鼠の貢献ほどになるまいものでもなからう。とりわけ、文献として今に残っている九世紀唐代の完全なシンデレラ物語の原文、訓読文、訳文には、口承文芸および関連分野研究にご専門の向きもまずはまあご流覧くださって、いささかなりともご示教を戴ければ幸い、と存するしだい。

さて――。

アメリカの民俗学者、フィンランド学派の口承文芸研究家ステイス・トンプソン（一八八五―一九七六）がその著『民間説話』*The Folklore*⁽³⁾で、全世界に亘って汎く知られていて大量の資料がありながら、系統付けられていないため大きな問題を抱えており、そのいずれもが今後の研究課題となっている、と指摘している六つの話の中に「シンデレラ（灰かぶり娘）がある。

『シンデレラ』と題してシンデレラ物語の最初の重要な収集を行ったのは英国のマリアン・ロウルフ・コックス（一八六〇―一九一六）⁽⁶⁾である。ただし、おもしろいことに英国には地物の「シンデレラ」は存在しなかったように、英国現行の話はペローの「サンドリヨン」（後述）の移入である。次いで小論冒頭にその名を挙げたスウェーデンのアンナ・ビルギッタ・ルート（一九一九―二〇〇〇）の研究『シンデレラ・サイクル』⁽⁷⁾が出ている。これはA・B・ルートが師事したC・W・フォン・シドウの拠るフィンランド学派の立場から、正規のシンデレラ物語のみではなく、「シンデレラ・サイクル」に属す、とA・B・ルートが考えた五つの話型を巻頭に掲げて比較的手法を用いかつ総合的に分析した論文である。ちなみにA・B・ルートは「最初、マリアン・ロウルフ・コックスの『シンデレラ』を読んだ時、私は、収集された多量の資料と、ミス・コックスが三四五以上のシンデレラ物語を再話している、その伎倆と完璧さとに深く感銘を受けた」⁽⁸⁾と記している。日本では『世界のシンデレラ物語』⁽⁹⁾として山室静に詳しい論考がある。

フィンランドの民俗学者アンティ・アールネ⁽¹⁰⁾（一八六七—一九二五）が一九一〇年出版した（いかにも律儀な題名の）業績『専門領域における知友各位のご支援を受けし昔話話型索引』*Verzeichnis der Märchentypen mit Hilfe von Fachgenossen*（ドイツ語）を前記S・トンプソンが英訳、更に増補改訂した『民話の話型』*The Types of the Folklore*は一九二八年に完成したが、S・トンプソンはこれに甘んじることなく、更に膨大な民話を集め、類別して、更に改訂増補を行ない、その結果分量は十倍に膨れ上がった。これが現在あるアールネ／トンプソン『民話の話型』である。すなわちAT（Arne/Thompson）。こゝでは上記のようにシンデレラ型は五一〇Aと整理番号が付けられている。五一〇は「シンデレラと蘭草頭巾」で、五一〇Bは「黄金のドレス、白銀のドレス、星星のドレス（蘭草頭巾）」である。

ただしATの更なる増補改訂版が二〇〇四年に新たに出た。ATUと略しておく。これがハンス・イエルク・ウター『国際的民話の話型』Hans-Jörg Uther: *The Types of International Folktales*である。こちらでは五一〇「シンデレラと驢馬皮」⁽¹¹⁾、五一〇A「シンデレラ（チェネレントラー、サンドリヨン、アッシエンプッテル）」⁽¹²⁾、五一〇B「驢馬皮」⁽¹³⁾（以前の「すなわちATにおいては」「黄金のドレス、白銀のドレス、星星のドレス（蘭草頭巾）」⁽¹⁴⁾と分類され、五一〇B*「箱の中の王女」⁽¹⁵⁾が立てられている。

ATU五一〇A「シンデレラ（チェネレントラー、サンドリヨン、アッシエンプッテル）」の筋〔英語の記述から邦訳〕

ある乙女が継母と継姉妹たちに苛められ、召使いにされて灰の中で暮らさねばならない。姉妹たちと継母が舞踏

会に行く時、彼女らはシンデレラ Cinderella 「灰だらけっ子」ほどの意の綽名。cinder (灰) + er (縮小語尾) + a (女性形) に不可能な仕事 (たとえば、灰から豆を選り出す) を命じる。乙女はその難題を鳥たちの助けで果たす。美しい衣装を何か超自然的存在、あるいは亡き母の墓に生えた樹木からもらい、名を知られずに舞踏会に出る。王子が乙女に対する恋に落ちるが、彼女は早めに舞踏会を後にしなければならぬ。同じことが次の晩にも起こる。しかし、三晩目に彼女は靴を片方失くす。

王子は、靴がびったり合う女性とだけ結婚しよう、と決意する。継姉妹たちはその靴に足がうまく入るように、自分たちの足を一部分切り落とす。一羽の鳥がこのごまかしに注意を促す。初め王子に隠されていたシンデレラが靴を試し、それがびったり合う。王子は彼女と結婚する。

なお小論における「⁽¹⁷⁾」内は注におけるそれも含めて論者の補足である。

〔二〕ロドペーの伝説

ギリシア人の大地理学者ストラボン⁽¹⁷⁾ (?前六三—紀元二二—二三) が著書『地理誌』^{ゲオグラフィカ}で述べている。このことはヤーコブ・グリムによって夙に指摘されている。⁽¹⁸⁾

他の二つより遙かに小型だが、遙かに多額の費用を要した、とのエジプトのピラミッドについてのストラボンの記事⁽¹⁹⁾。

(前略) 石は遠方から運んだものである。すなわち、エチオピア地方の山から出し、材質が硬く加工し難いため工事はひじょうに高くついた。

また、これはある遊女の墓で愛慕者たちが築いた、という。叙情詩人サッポーはこの遊女をドリカと呼んで、自分の兄弟カラクソスから恋されていた女人だとし、兄弟の方はレスボス酒をナウクラテイス市へ運んで来て商売をしていた、としているが、女人の方をドロピス(ママ)という名で呼ぶ人びともいる。

伝説もあつてそれによると、この女人が入浴している折一羽の鷺が履物の一方を侍女の手から掠うとメンピスマで運んで行った。そして、王が野天で裁きを下していたところ、鳥は王の頭上へ来るとその履物を王の膝へ落とし、王は履物の格好の良さと不思議な出来ごととに心動いて地方へ使いをやり、これを履いていた当人を探させた。女人はナウクラテイスの市で見つけ出され、伴われて都へ上ると王の妻となり、死後この墓を造つてもらつた。

以下はヤーコプ・グリムによる当該伝説の紹介。

彼女(ロドペー Rhodope)が沐浴をしていた時、一羽の鷺が彼女の靴の片方を攫い、メンフィス(上・下エジプト王国のうち下エジプトの大都。エジプト古王国時代の首都。カイロの南方にあつた)に持つて行った。ここでエジプト王が戸外(「公明正大な裁きであることを示すため衆人が視聴できる場所」で裁判を行つていた。すると鷺はエジプト王の膝へ靴を投げ込んだ。この椿事と靴の繊細さに勃然と心動かされたエジプト王は全土に命令を下し、この靴に合う美しい足を探させた。そしてナウクラテイス市(エジプト北部ナイル河大三角洲にあつた古代ギリシアの殖民都市)でロドペーが発見され、エジプト王の妃とされた。

ロドペー、あるいはロドピスについては、古代ギリシアの大歴史家ヘロドトス（?前四八四—四二四）がその著『歴史』^{〔1〕}（二卷一三四—一三五節）で記している。これによれば、美貌一世に轟いた前六世紀の古代ギリシアの白拍子（高級遊女）である。生まれはトラキアだがサモス島の金持ちに売られ、やがてやはりサモス島人に伴われてエジプトに到来、この地で名高い閨秀詩人サッフオーの兄弟のカラクソスによって身請けされて自由の身になり、その後巨富を蓄えたとか。なおヘロドトスは、ロドペーがエジプト王の妃になった云云については何も記していない。

〔三〕「灰だらけのじやんじ」(竈猫) La Gatta Cenerentola

十七世紀のジャンバッティスタ・バジレ著『お話中のお話』^{〔2〕}（五日物語）第一日第六話。

ナポリのある大公の一人娘ゼゾツラ（シンデレラ物語の女主人公に固有名詞があるのは珍しい）は父親に溺愛されており、有能な針仕事の先生カルモジーナをつけてもらっている。この女の先生は令嬢をとてかわいがる。大公が再婚。新しい奥方は意地悪で継子を苛めだす。

ゼゾツラはしょっちゅうカルモジーナに継母の酷い仕打ちを訴え、先生がお母様だったらいいのにと嘆く。そのうちカルモジーナは令嬢にこう知恵を付ける。

今着ている服を汚したくないから、蔵の大きな櫃に入っている古服を出して欲しい、と継母に頼め。継母は継子のみみともない身なりでいるのが好きだから、承知して衣装箱をかきまわすだろう。そしてその間蓋を支えている

ように、と言うだろう。継母が首をつっこんでいる時、蓋を落として、首を折ってしまえ。それから父親に、先生をお母様にして、と願え、と。

ゼゾッラはやがて先生の指示通りに継母を殺すことに成功。更に父親にしきりに頼んで、カルモジーナを奥方に迎えさせる。こうした折、ゼゾッラが独りで露台にいと、一羽の鳩が飛んで来て、願ひ事があつたら、サルデーニヤ⁽²³⁾の妖精鳩に言伝すれば、それが叶う、と言う。

カルモジーナは一週間ほどはゼゾッラをちやほやするが、やがて隠していた六人の娘を連れ込み、大公に巧みに取り入らせる。大公はこの女たちにかまかけ、ゼゾッラをかわいがらなくなる。すると彼女の立場は急転直下どん底に落ち、台所の竈^{かまど}の傍でぼろを着て働かされる始末で、竈猫^{かまどねこ}(ラ・ガッタ・チエネレントーラ La Gatta Genentola)⁽²⁴⁾とて綽名が付く。

ある時大公は政務でサルデーニヤ島へ赴かねばならなくなる。出発前に六人の義理の娘たちに、土産に何が欲しいか、訊ねる。最後に、ついでといった調子で、実の娘にも質問する。ゼゾッラは、妖精鳩に自分のことを伝え、何か戴けますか、と言って欲しい、と頼む。大公はサルデーニヤで公務を済ませ、六人の義理の娘たちへの土産物を調べ、船に乗り込む。ところが船はどうしても港から出られない。疲れきった船長の夢に、妖精が現れ、大公が実の娘との約束を守らないから船が出ないのだ、と告げる。船長が大公にこの旨を伝えると、大公は狼狽して妖精の洞窟を訪ね、娘の挨拶を言伝し、何かお土産を、と願う。洞窟から美しい乙女が現れ、私に縋って元氣を出すよう、娘さんに伝えてください、と言ひ、金色の棗椰子^{なつめやし}の木、シャベル、缶、絹のハンカチをくれる。

父親からこれらを受け取ったゼゾッラは驚喜して、植木鉢に棗椰子を植え、毎水をやり、ハンケチで拭く。四日すると、木は女性くらいの高くなる。そして木から妖精が出て来て、望みを訊く。そして呪文を教えてくれる。

これを唱えると、ゼゾツラが欲しい物は何でも出て来るし、また、戻しもできるのである。

お祭がある。カルモジーナの六人の娘たちは着飾って出かける。ゼゾツラは呪文を唱え、女王のような衣裳を纏い、十二人の従僕を従えて、白馬に乗って行く。義理の姉妹たちはだれだか分らないまま、この乙女の美しさを羨む。折しも王がそこに居合わせる。王は乙女に一目惚れし、供の者に命じて、跡をつけて名前と住まいを見つめるように、と言う。ゼゾツラは金貨を一掴み投げて、召使いがそれを拾っている間に逃げる。王は怒る。

次の祭。ゼゾツラは従者とお小姓付きの六頭立ての馬車で出かける。王に命じられた召使いが追って来ると、ゼゾツラは真珠と宝石を一握り投げて、召使いがそれを拾っている間に逃げる。王は激怒して、次に行方を突き止めない、ひどい目に遭わせる、と召使いを脅す。

三回目の祭。大勢の従僕を従え、黄金の馬車に乗ったゼゾツラ。しかし、引き上げる際、王の召使いはその馬車に縄で体をくくりつけてしまう。そこでゼゾツラは馬車を疾走させる。馬車は大層揺れ、召使いも諦めるが、ゼゾツラの木製の靴台（別段、小さい、とは強調されていない）が片方脱げて落ちてしまう。召使いはやむなくこれを拾って持ち帰り、王に報告する。

王は布告ふれを出し、ナポリ中の女を王の名の下で催す祝宴に招き、宴が果てる頃、全員に例の靴台を履かせる。しかし合う者は一人もいない。そこで王は、明日もう一度全員が来るよう厳しく命じる。そこで大公が、娘がもう一人いるが、惨めなるくでなしなので人前には出せない旨言上すると、王は、特にその娘を連れて来るよう言いつける。そこでゼゾツラも翌日は継母とその連れ子たちとともにやって来る。靴台がゼゾツラの前に置かれると、鉄が磁石に吸い付くように、ゼゾツラの足に飛びつく（話し手が靴台にこうした魔力を持たせたのは領ける）。王はゼゾツラと結婚する。六人の義理の姉妹は妬みで真っ青になって帰宅する（この娘たちとカルモジーナへの懲罰は別

段記されていない)。

[四] 「サンドリヨン、あるいは小さなガラスの上履き靴」 *Cendrillon ou la petite pantoufle de verre* ⁽²⁸⁾

シャルル・ペロー作『過ぎし昔の物語あるいはお伽話、ならびに教訓』またの名『鶯鳥おばさんのお伽話』(二六九七) Charles Perrault: *Les Histoires ou Contes du temps passé. Avec Moralitez (=Moralités)/Contes de ma mere l'Oye (=l'Oie)* (『いわゆる「ペローお伽話」・「ペロー童話」』収録) ⁽²⁹⁾

ペローがバジールの「灰だらけのにゃんこ(竈猫)」を読んでいたかどうか不明。しかし、ナポリ方言のイタリ
ア語なので、仮に本が入手できたにしてもそれを読解した可能性は少ない。 ⁽³¹⁾

なお、女主人公は継母が連れて来た二人の娘である義姉たちに苛められるが、純真無垢、優しい性格であり続け、最後に王子と結婚することになって、幸せになっても、義姉たちに復讐するどころか、それぞれを大貴族と結婚させてやる。逆境にあつてもめげてはならないが、順風満帆の境涯になつても謙虚にふるまうべきだ、とペローは倫理を説いているわけ。

ある大貴族の一人娘。母が死に、父が再婚。継母は二人の娘とともに邸に来る。連れ子たちは顔は綺麗だが心は良くない。母娘は女主人公を虐待し、下女として追い使う。夜になつても台所の炉の灰の上で寝なければならぬので、着物の尻が灰で汚れる。そこで邸では彼女を「キュサンドロン」(灰尻っ子)と呼ぶ。連れ子たちのうちいくらか言葉の丁寧な妹の方は「サンドリヨン」と呼ぶ。

サンドリオンは父親に訴えたりしない。なぜなら父親は継母の言いなりなので、却って叱られてしまふ、と察し

ていたので。

王宮で舞踏会が催される。王子が国中の身分の高い人たちを皆招待。

継母の連れ子たちは舞踏会に行く仕度のため、サンドリオンを手伝わせる。

義姉たちが出かけたあと、サンドリオンは泣き崩れる。すると女の名付け親（代母）の妖精が突然出現、援助を提供してくれる。妖精は、魔法の杖を使って、南瓜から馬車を、二十日鼠たちから馬を、立派な鬚を生やしている鼠から御者を、蜥蜴から従者を作り出し、サンドリオンの汚い服は金糸銀糸の刺繍を施し宝石を鏤めた衣装にし、真夜中には戻るよう、十二時を一分でも過ぎると皆元に帰ってしまうから、と堅く言い付ける。他にガラス製上履き靴をくれる（これは何かを変化させたのではないので真夜中を過ぎてもそのまま存在する）。

王子はこの美女と踊り、美味しい物を取ってくれる。サンドリオンはそうした物を義姉たちに分けて、話相手にする。十二時十五分前に別れを告げる。

翌晩ももっと素晴らしい衣装を着て舞踏会に。王子は傍を離れない。真夜中を告げる鐘の音にびっくりしたサンドリオンは慌てて逃げ出し、片方の上履き靴を脱ぎ捨ててしまう。

その上履き靴にびったり合う足の持ち主の女性と王子が結婚する、との布告。

国中の娘が試すが、足の嵌まる者はいない。最後にサンドリオンの父の邸にも靴が来る。連れ子たちが履くがだめ。サンドリオンが嘲られながら試す。真実が判明。サンドリオンは持っていたもう片方をも取り出して履く。そこへ妖精が現れ、サンドリオンの衣装を素晴らしいものに変える。義姉たちは跪いて謝る。サンドリオンは許す。王子と結婚。

〔五〕「灰だらけのフィネット」 Finette Cendron

マダム・ド・ノア夫人作『新小説あるいは当世風妖精たち』（別名『名高き妖精たち』⁽³³⁾（一六九八—）*Mme de Aulnoy: Contes nouvelles, ou les fées à la mode (Les illustres fées)*）収録。

これは両親に捨てられた子ども達の幸運譚と継子出世譚が接続されたものだが、そうした物語が当時フランスの民間に存在したのではなく、オノア夫人の思いつきによる、と思われるし、また正確には継子話でもない。

貧しい王夫妻の三人の王女が捨てられる。二度までは名付け親の妖精の力を借りた末妹フィネット（シンデレラ物語の女主人公に固有名詞があるのは珍しい）の助けで、無事道を探し当てて家に帰る。三度目には姉たちが知恵を出すが、道しるべとして姉たちが撒いた豆は、鳥たちに啄ばまれて無くなり、帰り道が分からなくなる。人食い鬼の城に迷い込む。フィネットの活躍で人食い鬼夫妻は殺され、三人の王女は城を乗っ取る（ペローの「親指ごっこ」⁽³⁴⁾ Le Petit Poucet + 「長靴を履いた牡猫」 Le Chat botté、および KHM 一五番「ヘンゼルとグレーテル」 KHM15 Hänsel und Gretel に似たモチーフ）。

しかし姉二人はフィネットを虐待し、汚れ仕事を押し付け、「フィネット・サンドロン（灰だらけのフィネット）」 Finette Cendron と綽名する。自分たちだけ舞踏会へ行く。

フィネットは妖精の援助で宝石や美しい衣装、小さい靴を手に入れ、やはり舞踏会に行く。舞踏会一の美女。名を訊かれ、「サンドロン」と名乗る。

靴を道で落とす。王子がこれを拾い、持ち主の女性に憧れて恋煩いに陥る。靴のテスト。フィネットと王子の結

婚。姉たちへの懲罰は無い。両親との再会。

〔六〕 カハーエム KHM (いわゆる『グリム童話集』)⁽³⁵⁾ 初版第一部 (一八二二) 二一「灰かぶり」Aschenputtel

「最も知られたものの一つで、至るところで語られている」というヤコブ・グリムの注が付いている。⁽³⁶⁾

ある金持ちの男の妻が死ぬ。臨終に一人娘を呼んで、死んだら天国から見守っている〔援助者・守護者＝亡き母親〕、墓〔亡骸を安置した棺を人の身の丈ほどの深さに埋め、その上に土を盛り上げ、芝で覆ったもの〕に木を植えよ、欲しい物があつたら、それを揺さぶれ、困ったことになったら助けを送る、と言う。娘はその通りにする。

木が二度目に緑になると、男は再婚。後妻は二人の娘を連れ子にして来る。母娘は三人とも意地悪で、先妻の一人娘を下女同然に追い使う。灰色の古い上着を着せる。夜になつても台所の炉の灰の上で寝なければならぬので、服が汚れ、「アッシエンプッテル」⁽³⁸⁾ (灰かぶり) と綽名される。

その国の王が王子の花嫁探しのために三日間舞踏会を開く。二人の高慢な義姉たちも招かれる。義姉たちは灰かぶりを呼び付け、仕度の手伝いにこき使う。その挙句、おまえも行きたいか、と嘲る。灰かぶりは、行きたいが衣裳が無い、と答える。年上の義姉は、おまえなどが来たら、自分たちが恥をかく。帰って来るまでに一皿の扁豆⁽³⁹⁾を盛り分けておけ、悪い豆が一粒もないように〔難題〕⁽⁴⁰⁾、と命じて出かける〔この場に継母は登場していない〕。

義姉たちを見送った灰かぶりは、炉に豆を撒いて、選り分けを始める。膨大な量なので、夜中まで掛かり、眠れないだろう、母親がこれを知ったら、と嘆く。すると二羽の白い鳩が窓から入って来て、選るのを手伝おうか、と灰かぶりに訊く。

「ええ」と灰かぶりは答えました。

悪いのは餌袋へ

いいのはお鍋の中へ⁽⁴⁾

すると十五分で選り分けが済む。それから鳩たちはこう言う。「灰かぶり、姉様たちが王子様と踊っているのを見たいなら、鳩小屋に登ってごらん」。灰かぶりが鳩小屋の階段のてっぺんまで登ると、大広間の光景が見える。灰かぶりは下りて来て、辛い気持ちで灰の中に横たわって眠る。「三日間の舞踏会のうち一日目はこうして過ぎ、灰かぶりは不参加」。

翌朝義姉たちは台所へやって来て、灰かぶりを羨ましがらせようと、舞踏会と王子のことを語る。灰かぶりが、自分も鳩小屋のてっぺんから見た、と言うと、年上の義姉は妬んで、鳩小屋を壊させてしまう。

灰かぶりはまた義姉たちの仕度を手伝わねばならない。まだいくらか同情心のあつた年下の義姉が「灰かぶり、暗くなったらあんたも出かけて、外の窓から覗けばいいじゃない」と言う。年上の義姉が、そうさせまいとして、袋一杯の蚕豆⁽⁴³⁾を明日まで選り分けするよう命じる。

灰かぶりが炉の前に坐って悲しく選り分けをしていると、例の鳩たちが飛んで来て、手伝いましょうか、と言う。

〔以下繰り返し〕

すっかり済んでしまうと、鳩たちは「灰かぶり、あなたも舞踏会に出かけて踊りたい」と訊く。灰かぶりは、こ

んな汚い身なりでは出かけられない、と答える。すると鳩たちはこう言う。「お母様のお墓の木のところに行つて、揺さぶつて、綺麗な衣装が欲しい、と願ひ事をなさいな。でも、真夜中にならないうちに戻るんですよ。」⁽⁴³⁾
そこで灰かぶりは外へ出て、木を揺さぶつて、こう言う。

かわいい木、ゆっさゆっさと揺れとくれ。

綺麗な衣装を投げとくれ。⁽⁴⁴⁾

唱えた途端、素晴らしい銀の衣装と真珠、銀の刺繍が付いた靴下、銀の上履パントフエール⁽⁴⁵⁾、それからその他の付属品が目の前にある。体を洗つて、着替えると、露に洗われた薔薇のように美しくなる。玄関を出ると、羽飾りを付けた六頭の黒馬の牽く馬車があり、その傍に青と銀のお仕着せを纏つた従者たちが控えている。灰かぶりが乗り込むと、王宮指して疾駆。

王子は馬車が止まるのを見ると、よその国の王女が乗りつけた、と思ひ、自身馬車の踏み段を下ろし、灰かぶりが現れると、王宮へ案内する。だれもが灰かぶりを讃嘆。王子は灰かぶりを鄭重にもてなし、一緒に踊り、花嫁としてこれ以上のひとはいはない、と思ふ。しかし、真夜中が来て、時計が十二時を打ち出すと、灰かぶりはお辞儀をして、これ以上留まれない、と言う。王子が下まで案内すると、馬車が待っていて、来た時と同様、壮麗に去つて行く。

灰かぶりは家に着くと、木のところに行き、こう唱える。

かわいい木、ゆっさゆっさと揺れとくれ。

衣装をまたまた取つとくれ。⁽⁴⁷⁾

そして灰だらけの着物を着て、顔を汚し、灰の中で眠る。

翌朝義姉たちはぶりぶりしてやって来て、黙ったままでいる。灰かぶりが〔実ははからかつて〕義姉たちいろいろ話す。

これで三回目だが、灰かぶりは義姉たちの仕度を手伝わねばならない。そのご褒美としてなんと、一皿の豌豆⁽⁴⁸⁾を選び分けるよう命じられる。

鳩との問答も同じ。

木への願い事も同じ。

衣装は前の物より遥かにすばらしく豪奢で、べた一面黄金と宝石で飾られている。それから黄金の刺繍を施された靴下と黄金の上履^{パントフッフェル}き靴 Pantoffel。灰かぶりがこれを身につけると、昼の太陽のように光り輝く。玄関の前には、頭に高い羽飾りを付けた六頭の白馬の牽く馬車と、紅と黄金のお仕着せを纏った従者たちが控えている。

王宮での王子の鄭重なもてなし。隅っこに立った義姉たちは妬みで蒼白な顔。

王子はこの王女の素性を知ったかったので、通りに家来を配置し、どこへ帰るか確かめさせようとし、彼女がさっさと立ち去れないよう、階段中に松脂^{まつやに}を塗らせておいた。⁽⁴⁹⁾ 灰かぶりは王子と踊りながら嬉しさのあまり真夜中のことを忘れていた。踊っている最中、鐘の響きを耳にし、びっくりして階段を駆け下りると、黄金の上履^{パントフッフェル}き靴の片方が階段にくっついてしまう。それが取れないまま脱ぎ捨て、階段を下りたところで、十二時が鳴り終わり、馬

車も馬たちも消えてしまう。王子は黄金の上履き靴を階段から挽ぎ離し、拾い上げる。しかし何もかも消えており、見張りの家来たちは、何も見ませんでした、と答える。

王子は、上履き靴が花嫁探しの助けになるだろう、と考え、この黄金の上履き靴がぴったり合う女性を花嫁にする、と告知する。しかし、だれにもとつても小さ過ぎた。いや、二つ分の上履き靴が一つになっていたとしても、たいていの人は足さえ入れることができなかつたろう。とうとう、二人の義姉たちが試す番になる。二人とも小さな美しい足の持ち主だったので、王子が自分たちの許に来て、まずいことにはなるまい、と喜ぶ。母親が、もしそれでも小さ過ぎたら、小刀で足をいくらか切り落とせ、と知恵を付ける。年上の義姉が自室で試す。爪先は入るが、踵が大き過ぎる。そこで踵を切り落とす。王子のところに行く。王子は、花嫁だ、と思い、馬車に伴い、連れで行こうとする。すると馬車の屋根にあの二羽の鳩が止まっていて、こう叫ぶ。

うしろをこらんな、うしろをこらんな。

お靴の中には血が一杯。

お靴がちっちゃ過ぎるもん。

ほんとの花嫁、まだおうち。⁽⁵¹⁾

王子が上履き靴に目を向けると、血が溢れているので、騙された、と気づき、偽の花嫁を家に戻す。母親が二番目の娘に言う。「上履き靴を持つてつて、小さ過ぎたら、足の指を切った方がいいよ」と。試すと、足が大き過ぎたので、娘は歯を喰いしぼり、指をたっぷり切り落とし、上履き靴に足を押し込んで、部屋から出る。王子は、本

物だ、と思い、馬車で一緒に立ち去ろうとする。墓の傍を通る。しかし門のところに来ると、鳩たちがまた叫ぶ。

前掲と同じ唄（略）

王子は娘の足から血が溢れているのを見る。そこで母親に、これは本当の花嫁ではない、他に娘はいないか、と訊く。「いいえ」と母親は答える。「まだおりますのはみつともない灰かぶりだけでございます。これは下の灰の中に坐っておりまして、この上履パントフフェルき靴シューなんぞ合うわけありません」。そして王子がきつく要求するまで、灰かぶりを呼ばせようとしない。灰かぶりが呼ばれ、王子が来ていると知ると、彼女は顔と両手を綺麗に洗う。灰かぶりが重い靴シュー (32) を左足から抜き、足を黄金の上履パントフフェルき靴シュー (33) に乗せ、ちよつと押し込むと、鑄型に嵌めたようにびつたり合う。灰かぶりが立ち上がってお辞儀をすると、王子はその顔を覗き込み、あの美しい王女であることに気づく。継母と二人の高慢な娘たちは仰天して、蒼白になる。王子は灰かぶりを連れ去り、馬車に乗せる。すると鳩たちがこう叫ぶ。

うしろをござんな、うしろをござらん。

お靴の中じゃ血なんてないよ。

お靴はちっちゃ過ぎないもん。

ほんとの花嫁連れてくねえ。(34)

〔これでおしまいとなり、継母と義姉たちへの懲罰は無い〕。

〔七〕 K H M 決定版⁽⁵⁵⁾ 「灰かぶり」 Aschenputtel

一八一九年ヘッセンの三つの物語を基に改作された。

市⁽⁵⁶⁾に出かける父親の帽子に最初につかる木の枝（榛^{はしづみ}）を土産に欲しい、と主人公が願い、これを亡くなった母親の墓に植えるモチーフと、結びの主人公の結婚場面で、二羽の鳩によって、意地悪な義姉たちの両目がつつき出されてしまう結び「悪人への懲罰モチーフ」が付け加えられる。

ある金持ちの男の妻が死ぬ。臨終に一人娘を呼んで、死んだら天国から見守っている、と言う〔援助者・守護者
|| 亡き母親〕。

一年後男は再婚。後妻は二人の娘⁽⁵⁷⁾を連れ子にして来る。母娘は三人とも意地悪で、先妻の一人娘を下女同然に追
い使う。灰色の短い上つ張りを着せ、重い木靴⁽⁵⁸⁾を履かせる。夜になっても「暖を取るため」炉の灰の中で寝なけれ
ばならないので、服が汚れ、「アッシエンプツテル」（灰かぶり）と綽名される。

父親が市に出かける時、三人の娘たちに土産の希望を訊く。灰かぶりは、家への帰り途で最初に父親の帽子にぶ
つかる（偶然 || 神の摂理？）木の小枝を求める。父親はその通りにして榛の枝を持ち帰る。

灰かぶりは枝を母親の墓に植える。枝は育って木となる。灰かぶりは毎日三度づつ木の下（墓前）に行って泣
く。そのたびに一羽の白い小鳥（鳩）とは記されていない）が来て、木に止まり、灰かぶりが欲しい物（美味し
い食べ物・飲み物などであろうか）を願うと、それをくれる。

その国の王が王子の花嫁探しのために三日間饗宴を行い、国中の美しい乙女を招く。灰かぶりも行きたがる。

継母は一皿の扁豆を灰の中におちまけ、二時間で拾い出せたら、行かせてやる、と言う。灰かぶりが裏へ出て、鳥たち呼び掛けると、二羽の白い鳩を始め、たくさんの鳥たちがやって来て、一時間ほどで難題を片付ける。しかし、継母は約束を守らず、今度は、二皿の扁豆を一時間のうちに灰の中から拾い出す、という条件にする。この難題も鳥たちの援助で三十分もしないうちに片付く。しかし、継母は約束を守らず、二人の娘とともに饗宴へ出掛けてしまう。

だれもいなくなると、灰かぶりは母親の墓に行き、願ひ事を言う。

かわいい木、ゆっさゆっさと揺れとくれ、

黄金きんと銀とを投げとくれ。³⁹⁾

するといつもの小鳥が黄金と銀の衣装を投げ落とす。絹と銀で刺繍した上履パンプスき靴シューズも。この身なりに饗宴に行く。継母、義姉たちもどこかのお姫様と思う。王子はこの美女としか踊らない。日が暮れる。灰かぶりは帰ろうとする。王子が追う。灰かぶりは自分の家の鳩小屋に跳び込む。王子は灰かぶりの父親に、どこかの乙女がこの鳩小屋に跳び込んだ、と言う。父親は、ひよつとすると灰かぶりかも知れない、と思い、斧で小屋を壊す。しかし、だれも中にいないし、家に入ると、灰かぶりが汚い服を着て灰の中に転がっている。灰かぶりは小屋から抜け出し、榛の木に駆けつけ、墓の上に服を置き、小鳥がそれを持って行ったのである。

二日目も同じ。衣装は前の日のよりずっと立派パンプス靴シューズの描写無し。日が暮れて、灰かぶりが帰ろうとする。

王子が追う。灰かぶりは家の裏の梨の大木に攀じ登る。王子が父親にそのことを言う。父親は斧で木を伐り倒す。だれもない。

三日目。極めて豪華できらびやかな衣装。上履パントフネルは全部黄金でできている。日が暮れて、灰かぶりが帰ろうとする。王子はあらかじめ階段中に松脂まつごを塗らせておいた。灰かぶりが駆け下りると左の上履パントフネルが階段にくっついてしまう。王子がそれを拾い上げると、小さく、優美で、全部黄金。⁽¹⁾

王子は二回乙女を見失ったあの家の男の許に行き、この黄金の靴シューにぴったり合う女性と結婚する、と言う。

年上の義姉が自室で試す。母親も随って行く。親指が大きくて入らない。母親は「親指を切っておしまい。王妃様になったら足で歩く必要は無いよ」と勧める。娘はその通りにして、足を靴シューに押し込む。王子のところに行く。王子は、花嫁だ、と思い、馬に乗せて一緒に乗って行く。墓の傍を通る。あの二羽の鳩が榛の木に止まっっていて、こう啼く。

うしろをござらんな、うしろをござらん。

お靴の中には血が一杯。

お靴がちっちゃ過ぎるもん。

ほんとの花嫁、まだおうち。⁽²⁾

王子は娘の足から血が溢れているのを見る。そこで偽の花嫁を家に戻し、他の娘に靴シューを履かせるように言う。年下の義姉が自室で試す。踵かかとが大きくて入らない。母親は「踵を切っておしまい。王妃様になったら足で歩く

必要は無いよ」と勧める。娘はその通りにして、足を靴シヤに押し込む。王子のところに行く。王子は、花嫁だ、と思ひ、馬に乗せて一緒に乗って行く。墓の傍を通る。あの二羽の鳩が榛の木に止まっています、こう啼く。

前掲と同じ唄（略）

王子は娘の足から血が溢れているのを見る。そこで偽の花嫁を家に戻し、他に娘はいないか、と男に訊く。男は「死んだ妻から生まれたちっぼけなでき損ないの灰かぶりしかもうおりません。⁽⁶³⁾これは到底花嫁にはなれっこありません」と答える。

王子は、どうしてもその娘に会いたい、と言ひ張る。灰かぶりは両手と顔をきれいに洗い、王子の前に出る。王子が黄金の靴シヤを渡すと、灰かぶりは床几に腰掛け、重い木靴ホルツシヤから足を抜き、上履パントフエルき靴に差し込む。ぴったり合う。灰かぶりが立ち上がり、王子がその顔を覗き込むと、一緒に踊ったあの美しい乙女であることが分かる。そこで彼は「このひとがほんとうの花嫁だ」と言う。

王子が灰かぶりを馬に乗せ、榛の木の傍を通り掛かると、二羽の白い鳩が啼く。

うしろをござんな、うしろをござらん。

お靴の中じゃ血なんてないよ。

お靴はちっちゃ過ぎないもん。

ほんとの花嫁連れてくねえ。⁽⁶⁴⁾

それから鳩たちは灰かぶりの右肩と左肩に止まり、そこにそのままじっとしている（婚礼の時にもそうしているのである）。

王子と灰かぶりの婚礼が行われることになる、義姉たちもやって来る。灰かぶりに取り入って、幸運のおこぼれをもらおう、と思つて。花嫁と花婿が教会に入る時、年上の義姉が「花嫁の」右側に、年下の義姉が左側に就く。鳩たちがそれぞれの片目をつき出す。教会から出る時、年上の義姉が「花嫁の」左側に、年下の義姉が右側に就く。鳩たちがそれぞれのもう一方の目をつき出す。こうして義姉たちは意地悪と偽りの罰として生涯目が見えなくなつてしまふ。

〔八〕唐代の完全な文献シンデレラ物語「葉限」^{イエンゲン}

「葉限」^{イエンゲン}（「葉限」^{イエンゲン}）⁽⁶⁵⁾ Ye-lin は中国唐代（六一八―八九八）九世紀の文献、すなわち当時の文人にして高級官僚段成式^{トウゲイコウシキ}（？―八六三）撰の大博物誌・異事奇譚集成『酉陽雜俎』^{ユイヤウザツロ}（『酉陽雜俎』^{ウイヤウザツロ}）前集二十卷続集十卷中（続集卷一支諾臯上）⁽⁶⁶⁾に収められている世界最古の完全な文献シンデレラ譚である。⁽⁶⁷⁾なお、本論冒頭でもお断りしたが、以下の原文、訓読文、訳文の「――」内は論者の補足である。

『酉陽雜俎』のテキストとしては、明の李雲鵠校訂本⁽⁶⁸⁾が知られているが、これには句読点が無い。

以下に方南生点校本⁽⁶⁹⁾（底本は趙琦美本。明万曆年間）により現代中国の句読点および引用符号等が付されたものを示す。

原文。ただし、旧字は新字に改めた。

南人相伝、秦漢前有洞主呉氏、土人呼為呉洞。娶而妻、一妻卒、有女名葉限。少惠善淘一作鉤金、父愛之。未歲父卒、為後母所苦。常令樵險汲深。時嘗得一鱗二寸余、積鬢金目、遂潛養於盆水、日日長、易數器、大不能受、乃投於後池中。女所得余食、輒沈以食之。女至池、魚必露首枕岸、他人至不復出。其母知之、每伺之、魚未嘗見也、因詐女曰「爾無勞乎、吾為爾新其襦。」乃易其弊衣。後令汲於他泉。計里數百一作里也。母徐衣其女衣、袖利刃行向池呼魚、魚即出首、因斫殺之。魚已長丈余、膳其肉、味倍常魚、藏其骨鬱棲之下。逾日、女至向池、不復見魚、乃哭於野。忽有人被髮粗〔李雲鵠校本では「麓」〔麤〕の俗字〕衣、自天而降、慰女曰「爾無哭、爾母殺爾魚矣！骨在糞下、爾婦、可取魚骨藏於室、所須第祈之、當隨爾也。」女用其言、金璣衣食隨欲而具。及洞節母往、令女守庭菓。女伺母行遠、亦往、衣翠紡上衣、躡金履。母所生女認之、謂母曰「此甚似姊也。」母亦疑之、女覺遽反、遂遺一隻履、為洞人〔所〕得。母婦、但見女抱庭樹眠、亦不之慮〔不慮之？〕。其洞隣海島、島中有国名陀汗、兵強、王〔明の毛晋の校本に拠る。原典は「三三」〕數十島水界千里。洞人遂貨其履於陀汗国、国主得之、命其左右履之、足小者履減一寸、乃令一国婦人履之、竟無一称者。其輕如毛、履石無聲。陀汗王意其洞人以非道得之、遂禁錮而拷略之、竟不知所從來、乃以是履棄之道旁、即遍歷人家捕之。若有女履者、捕之以告。陀汗王怪之、乃搜其室、得葉限、令履之而信。葉限因衣翠衣、躡履而進、色若天人也。始具事於王。載魚骨与葉限俱還国。其母及女即為飛石〔所〕擊死、洞人哀之、埋於石坑、命曰懊女塚。洞人以為媒祀、求女必心。陀汗王至国、以葉限上婦。一年、王貪求、析於魚骨、宝玉無限。逾年、不復心。王乃葬魚骨於海岸、以用珠百斛藏之、以金為際、至徵卒叛時、將瓮以贖軍。一夕、為海潮所淪。成式旧家人李士元所說。士元本邕州洞中人、多記得南中怪事。

訓読文。ただし、分かり易いように句読点を改めた箇所がある。

南人相い伝うるに、秦漢の前洞主 呉氏なる有りて、土人呼びて呉洞と為す。両妻を娶れるが、一妻卒す。女有りて葉限と名づく。少きより恵くして善く金を洵ぐ〔あるいは「鈎す」〕。父之を愛す。未歳父卒するに、後母の苦しむる所となる。常に險しきに樵し深きに汲ましむ。時に嘗て一鱗の二寸余なるを得たり。積鬻金目なり。遂に潜かに盆水に養うに、日日に長じ、数器を易うれども、大にして受くること能わず。乃ち後池中に投ず。女得る所の余食を輒ち沈めて以て之に食わしむ。女池に至れば、魚必ず首を露わにして岸に枕し、他人の至れば復出でず。其の母之を知り、毎に之を伺えども、魚未だ嘗て見れず。因りて女を詐りて曰く「爾勞する無きか。吾爾の為に其の襦を新たにせり。」と。乃ち其の弊衣を易う。後他泉に汲ましむ。里を計るに数里〔「百」はおかしいので「里」に改めた〕なり。母徐ろに其の女の衣を衣け、利刃を袖にし、行きて池に向かいて魚を呼ぶに、魚即ち首を出だす。因りて斫りて之を殺す。魚已に長丈余、其の肉を膳うに、味わい常の魚に倍せり。其の骨を鬱棲の下に蔵す。日を逾えて、女の至り、池に向かうに、復魚を見ず。乃ち野に哭す。忽ち人有り。被髪粗衣にして、天より降り、女を慰めて曰く「爾哭すること無かれ。爾の母爾の魚を殺せり。骨は糞下に在り。爾帰りにて、魚骨を取りて室に蔵すべし。須むる所第之を祈らば、当に爾に随わん。」と。女其の言を用うるに、金襴衣食欲するに随いて具わる。洞節に及び母は往き、女をして庭菓を守らしむ。女母の遠きに行くを伺い、亦往く。翠紡の上衣を衣け、金の履を躡む。母の生む所の女之を認め、母に謂いて曰く「此れ甚だ姉に似れり。」と。母亦之を疑う。女覺りて遽に、遂に一隻の履を遺し、洞人の得る所となる。母の帰るに、但女の庭樹を抱きて眠れるを見、亦之を慮らず。其の洞海島に隣す。島中に国有りて陀汗と名づく。兵強くして、数十島水界千

里に王たり。洞人遂に其の履を陀汗国に貨れり。国主之を得、其の左右に命じて之を履かしむるに、足の小なる者の履くに一寸を減ず。乃ち一国の婦人に之を履かしむれども、竟に一の称う者無し。其の軽きこと毛の如く、石を履むに声無し。陀汗王其の洞人の非道を以て之を得るかと思ひ、遂に禁錮して之を拷略すれども、竟に従りて来たる所を知らず。乃ち是の履を以て之を道旁に棄て、即ち人家を遍歴して之を捕らえんとす。若に女の履く者有り。之を捕らえて以て告ぐ。陀汗王之を怪しみ、乃ち其の室を捜し、葉限を得、之に履かしむるに信なり。葉限因りて翠衣を衣け、履を躡みて進むに、色天人の若し。始めて事を王に具う。魚骨と葉限を載せて俱に国に還る。其の母及び女は即ち飛石の撃つ所となりて死す。洞人之を哀れみ、石坑に埋め、命けて憫女塚と曰う。洞人以て媒祀を為し、女を求むれば必ず応ず。陀汗王国に至り、葉限を以て上婦となす。一年、王貪り求め、魚骨に祈るに、宝玉限り無し。年を逾ゆるに、復応ぜず。王乃ち魚骨を海岸に葬り、以て珠百斛を用いて之を蔵し、金を以て際となす。徴卒の叛する時に至り、將に發きて以て軍を贍わんとす。一夕、海潮の淪むる所となる。成式の旧家人、李士元の説く所なり。士元は本邕州、洞中の人にして、多く南中の怪事を記し得たり。

訳文。

南方の人たちの間にこんな言い伝えがある。

秦・漢の時代の前（「昔むかしのその昔」現地部族の村である洞の領主に呉という者があつた。土地の人間はこの洞を呉洞と称した。呉は二人の妻を持つていたが、一人の妻は亡くなり、あとに娘が残された。葉限（シンデレラ物語の女主人公に固有名詞があるのは珍しい）」という名だつた。葉限は小さい時から聡明で黄金を探るのが上手

だった。父親はこの子をかかわいがっていた。ところが父親が老年になって死ぬと、葉限は後の母（「継母」）に苛められるようになった。継母はこの娘にいつも険しい山で薪を採らせ、深い谷で水を汲ませるのだった。

ある時、水を汲みに行った場所で二寸余りの小魚を捕らえた。赤い背鱗で目が金色（「という珍しい魚」）だった。そこで水を入れた鉢でこっそり飼うことにしたところ、一日一日どんどん大きくなり、容れ物の鉢を幾つも取り替えたが、魚が大き過ぎて入らなくなった。そこで家の背後にある池に放したのである。娘は自分のもらう食事の食べ余しをいつも池に投げ込んで魚に食べさせてやった。娘が池に行くと、魚は必ず頭を水面に出し、岸に載せるのだったが、余人が来た場合は出て来なかった。

継母はこのこと（「魚の存在」）を知り、しよつちゆう様子を窺っていたが、魚が現れることは決してなかった。そこで（あることを企み）葉限にこんなことを言って騙した。「おまえ、くたびれていないかい（「おまえ、日頃よく働いてくれるねえ」）。（その褒美に）あたしはおまえのために短か上衣を新しくこさえてやったよ」。そうしてこれまで葉限が身につけていたばろ着物と取り替えたのである。その後（すぐに）（いつも水を汲む場所とは）別の泉に水を汲みにやらせた。そこまでの距離は数里だった。（「こうして葉限がいなくなる」と）継母は悠悠と葉限の古着を纏い、鋭利な刃物を袖に隠し、出かけて行って池に向かって魚を呼ぶと、魚はすぐさま頭を出し（て岸に載せ）た。そこで斬りつけて、魚を殺してしまった。もうその時には魚の大きさは一丈余りにもなっていた。料理して食ったところ、その旨さといったら普通の魚の倍だった。骨は堆肥の下に埋めて隠した。

翌日葉限が池にやって来て魚を呼んだが、魚の姿はとんと見えない。そこで（「人気のない」）野原で声を挙げて泣いた。すると、髪の毛はざんばらで粗末な着物の人が天から降りて来て、葉限を慰めてこう告げた。「さあさ、泣くんじやない。おまえの魚を殺したのはおまえの継母だ。魚の骨は堆肥の下にある。おまえ、家に帰り、魚の骨を掘

り出して、部屋に隠すんだよ。欲しい物があつたら、骨に祈るだけでいい。すぐ聞き届けられるからね」。葉限が言われた通りにすると、黄金でも宝玉でも衣服でも食べ物でも欲しい物はなんでも出て来るのだった。

やがて洞の祭日となると、継母は「自分が生んだ娘と一緒に連れて」これに出かけて行ったが、葉限には「意地悪をして」庭の果樹の見張りを「をして留守」するように言い付けた。葉限は継母が遠くに行ったのを見澄まし、自分も祭に赴いた。「魚骨に祈つて出した」翡翠の羽で織つた「この上もなく麗しく豪華な」上衣を纏い、黄金の履き物を履いた姿だった。「日頃の惨めな恰好かっこうの小娘とはまるで異なる素晴らしい身なりの絶世の美女だったが」継母の生んだ娘「葉限の腹違いの妹」がこれに気づき、母親に「あの女の人、とっても姉さんに似てるわ」と言った。母親も「、そういうえば随分似てるわねえ、と」怪しんだ。「そして傍にやつて来そうになつた」。葉限は、気づかれた、と悟り、慌てて逃げ出したが、その際履き物の片方を落としてしまい、洞の者がこれを拾つたのである。祭から引き揚げて来た継母は、葉限が（継母に、見張れ、と言いつけられた）庭の果樹を抱いて眠りこけ「たふりをし」ているのを目にし、「さっきの美女は別人だった、と納得して」何も気にしなかつた。

この洞の近くに海洋の島があつた。島の中には国があり、「陀汗国」といつた。この国は兵力が強く、数十の島鳥、千里四方に亘る「要するに「広大な」」海域を支配下に置いていた。「葉限の履き物の片方を拾つた」洞の者はこれを陀汗国で売つた。国王である王がこれを手に入れ、周囲の婦人たち「妻妾」に履かせてみたところ、「履き物が小さいのでだれ一人履けず」、最も足の小さい婦人が履こうとしてもその足より更に一寸も小さかつた。そこで王は陀汗国の女に履かせたが、一人として履ける者はいない。そしてこの履き物の軽いことときたらまるで毛皮のよう、また、石を踏んでも音がしないのだった。陀汗王は、「こんな不思議な履き物を売つた」呉洞の者は何か悪事を働いてこれを奪つたのではないか、と考え、牢獄に閉じ込め、拷問して問たひしたが、だれの持ち物だった

のか結局分からなかった。そこで「王自身従者らを連れて呉洞まで出掛け」この履き物を「呉洞の」道端に棄てさせ、「それをひそかに監視させ、拾った者がいたら」すぐさま家を巡り歩いて「搜索し」、「この履き物の」関係者を捕まえようとした。するとある娘がこれを「拾つて無理に」履いた。そこで「監視していた者は」この娘を捕らえて、王に告げた。しかし陀汗王は「どうもちゃんと足に合っていない」と怪しみ、その「娘（＝葉限の腹違いの妹）の」家进行搜索させると、葉限がいた。葉限に履かせると「足と履き物がびたりと合い」真の持ち主であることが実証されたのである。更に葉限は「一旦引き下がり」翡翠の羽で織った上衣を身につけ、「もう片方のと合わせ」黄金の履き物を履いて「王の前に」歩み出た。その容色はさながら天女のように素晴らしく美しかった。そして初めて詳しい事情を王に申し述べたのである。

王は魚骨と葉限を自分の車に乗せて一緒に呉洞から陀汗国へと帰った。「しかしその前に葉限にひどいことをした葉限の継母と腹違いの妹の処刑を命じたので」継母とその実の娘は投石で撃ち殺された。呉洞の者たちはこれを哀れみ、石の穴に埋葬し、塚を築いて「懊女塚」と名付けた。供物を供えてお祀りをし、女の子を授けてください、と祈れば、必ず感応があつて、女の子が生まれたのである。

陀汗王は国に到着すると葉限を「愛し尊んで」上婦とした。それからの一年、王は貪欲に魚骨に祈り、宝玉を限りなく得た。けれども翌年になるともう祈っても応じてはもらえなかった。そこで魚骨を海岸に埋葬し、「それまでに得た」真珠百石でこれを覆い隠し、黄金を穴の縁に置いた。後、徴募した兵卒が叛乱を起こした時、これを掘り出して軍「鎮圧軍？叛乱軍？」への物資支給に役立てようとしたが、ある晩高潮があつて沈んでしまった。これは私、成式が元召使っていた李士元なる者が語ってくれた話である。士元は元來邕州の現地部族の村の出身で、南中国の不思議な事跡を数多く記憶している。

〔九〕朝鮮のシンデレラ物語「コンジ(豆っ子)・バッジ(小豆っ子)」⁽⁹⁸⁾

女主人公コンジの援助者は天から降りて来た牝牛であり、食物を恵み、労役を代わって片付け、隣村の親戚の家での盛大な祝宴に出かけるためのすばらしい衣装と花靴⁽¹⁰⁾を授けてくれる。彼女が宴会に行くのを妨げよう、と継母が課した難題は、膨大な量の反物を織り上げること、広い部屋の掃除、各部屋の「温突^(オシド)」⁽¹⁰⁾ 焚き口の灰の除去(「ここで灰が出て来る」、火の焚き付け、底に穴が開いている壺への水の汲み込み、稲の舂^(ウ)五石を搗く、などだが、一部は雀や蛙が援助してくれる。宴会に出かけたコンジは継母とその連れ子である意地悪な義妹のバッジに嫉妬されて追い出される。逃げる途中花靴を落とす。これを手に入れた監司^(カムサ)が⁽¹⁰⁾ 持ち主を訊ねると、テストにバッジばかりか、既婚者である継母まで挑戦、大き過ぎて入らない足の横側を自ら包丁で削ぐ。⁽¹⁰²⁾

〔十〕日本のシンデレラ物語(民話と古典文学)

(1) 民話「おうふとはげせん」⁽¹⁰³⁾ (これには履き物のモティーフあり)⁽¹⁰⁴⁾

関敬吾編著『日本昔話大成』⁽¹⁰⁵⁾ で見る限り、諸モティーフの符号する類話は「おうふとはげせん」〔長崎県北高来⁽¹⁰⁶⁾ 郡での採録〕に留まる。これは関が記している粗筋から推察すると、こんな話と思われる。

おうふは先妻の子で、後妻である継母に苛められる。継母の難題としては、粟^(あわ)を撒き散らしておいて、拾え(雀の援助)、碎け米を籠の灰に混ぜておいて、選り分ける(やはり雀の援助)、がある。その他の援助者はどこかの老爺。遊びに行け、と言ってくれる。おうふが、着物が無い、と答えると、衣装を入れた風呂敷包みが天から落ちて

来る。これを来たおうふを老爺が馬に乗せて連れて行つてくれる。杵くづを落おとす。長者の息子が杵くづを拾い、それに足の合う娘を嫁にする、と触れを出す。継母は実子のはげせんを連れて行き、無理に杵くづを履はかせるので、はげせんはびっこになってしまふ。おうふは杵くづのテストに合格、長者の家へ嫁入りする。⁽¹⁰⁷⁾

(2) 古典文学 『落窪物語』⁽¹⁰⁸⁾ (これには履き物のモテーフ無し)

平安時代中頃の十世紀終わり、ほぼ正暦・長徳年間(九九〇—九九九)に作られた、と考えられる『落窪物語』は、女主人公(亡き母が「女王」、母の祖父(祖母?)は「宮」。従って帝の曾孫なので、貴族社会にあつても一際高貴。かつ美しい)が、幼い時から実の父(中納言 源忠頼みなもとのただより)の邸に引き取られ、みすばらしい姿で継母(父の正妻)「北の方」^{かた}のさまざまな虐待に耐えて日日を送るうち、その美しさと性格の愛らしさ、清らかさを大貴族の若君である左近少将ささきのしょうしょう(道頼みちより)に見出され、忠実な若い侍女「あこき」(阿漕。この女性は機略縦横の上、受領ずりうの妻となつている豊かなお婆から必要な物品を入手できる身)の援助などにより、めでたく左近少将との結婚に至り、やがて父の邸から脱出、夫道頼とともに幸せな生涯を送る、という継子話である。履き物のモテーフを欠くシンデレラ物語と言えよう。

本論冒頭で紹介した日本における詳しい研究『世界のシンデレラ物語』の中で、著者山室静は「日本の継子話」の一つとして『落窪物語』を挙げている(同書一七ページ以降)が、これを殊更に日本のシンデレラ物語として指摘してはいない。しかし論者はあえてそれに踏み切る。なぜなら以下に記すように六つものモテーフをシンデレラ物語と共有している(ただし場合によっては⑥、すなわち継母とその実の娘たちへの懲罰を欠くシンデレラ物語もある。文人が物語に仕立てたものはおおむねしかり。もつとも『落窪物語』では⑥がまた一通りでない)から

である。

①女主人公が妙な呼び名「落窪の君」。ただし残念ながら、これは「灰」とは関係無い。父の邸であてがわれている居所が寝殿の片隅の、間口二間の「落窪」——周りより一段低く造られている空間——なので」を継母に付けられている。

②継母に過重な労役（縫い仕事）を課され、召使い同然に酷使される。

③父親は女主人公にほとんど無関心（妻の讒訴^{ざんそ}を真に受けて女主人公に腹を立てることもある。この点は、さこそあれ、とは思うが、民話では普通そこまでは語らない）。

④一家を挙げて出掛ける楽しい物見遊山（石山寺詣で）の際継母の悪意で邸に残される。

⑤主人公に援助者（ただし、超自然的援助者 supernatural helper ではないが）がいる。

⑥「女主人公が意図したのではなく、それと知ると非難するのだが」継母と腹違いの姉妹たちである三の君と四の君^⑨（姉妹たちは殊更女主人公に親切だったわけではないが、女主人公への苛めに特に関与してはいないので）への懲罰がある。

その名は知られていない『落窪物語』の作者（「さして位の高くない男性貴族か」が、ペローのように、当時口承されていた民話を題材として一編の物語を編んだとすれば、この基となった民話には、作者が教養ある文人の賢しから削ってしまった土俗的モチーフがもつと何かあったのかも知れない。

もっとも小説としてこれを見れば、多彩な登場人物が端役のだけかれに至るまでいずれも活き活きとしており、

それらの会話文による細やかな心理点描はみごとである。また、道化た好色漢の尾籠な滑稽ぶりなどに留まらず、随所に諧謔が効いており、作者の知性と感性が並ならぬものであることを示す。就中悪役の北の方は最初から最後まで旺盛な物言いと行動ぶりで終始する。民話でも、悪役が登場する場合、虐げられる主人公よりもずっと濃厚な色彩で描かれるのが一般。『落窪物語』の作者は民話の精神を体得していたようで、優れた感覚である。少なくとも物語における悪役の価値を十二分に心得て、北の方を徹底的に遣い廻している。ついでに申せば、平安朝の宮廷貴族の生活が軽妙かつ写実的に（もっとも、女主人公夫妻の栄華はこの上なく豪華なものとして語られていて、現実にあつた、とは思えない箇所も少なくないが）綴られているだけでも大いに娯しめる作品。

ただし、巻之一から巻之四までであるこのかなりな長編を一本の校注者所弘の解説に従い次の三部に分けた場合、シンデレラ物語に相当するのはほぼ第一部である。

第一部 「落窪の君」と継母から蔑称される姫の辛い生活とその救済。三の君の婿である 蔵人少将くらひのしやうしやうの家徒で左近少将の乳母子めのとこの帯刀おびわきは、姫をいとおしんでいる侍女の阿漕の夫なので、その口から間接にはあるが薄倅の麗人の存在を伝え聞いた左近少将が姫の許へ通うようになり、やがて姫はあることで北の方のため監禁された物置のごとき部屋から、少将によって救い出され、少将の父左大将さだだいしやうの別邸で阿漕とともに安らかな暮らしに入る（巻之一全部と巻之二の初め）。

第二部 継母北の方への左近少将の執拗な復讐。少将が謀り事を巡らし、手を替え品を替え、北の方に懲罰を加える——この懲罰は北の方の娘たちである三の君と四の君をも巻き込む——（巻之二の残りと巻之三の初め）。こよなく愛しい妻である姫が苛められ続けだったのが腹立たしくて堪らず、そうした行為に走るのである。悪役に對

する懲罰自体は極めて民話的なのだが、民話が物語に仕立てられると一般には懲罰を欠くにも関わらず、『落窪物語』の場合作者はこれに大いに技巧を凝らして特異である。姫自身は大層心優しく、夫のこうした行為を不快に思い、非難する。この点でも姫は、無個性な民話的女主人公——民話では懲罰に賛成もしないが反対もせず全く没交渉——としてではなく、ペローの物語におけるサンドリヨンと同じく温雅で思慮深い人物像に描かれている。このように深みのある立体的性格は（もとより近代文学のそれとは懸隔が甚だしいにしても、これまたペローの物語におけるのと同様に）毛頭民話的ではない。

第三部 姫と左近少将夫妻の栄華。夫道頼は急速に昇進して行き、最後には四十歳にもならぬ内に太政大臣に任じられ、位人臣を極める。夫妻の長女は帝の后になる。姫を直接・間接に援助した阿漕（それに連れてその夫の帯刀も）、阿漕のおじ・おばも眷顧を蒙り、すこぶる幸せに世を送る（卷之三、四は大方こうした栄華の事細かな描写に当てられている）。——姫はそうした生活のかなり初期に父との再会を望み、老い^{はう}耄けた父は単純に（つまり、かつて娘をないがしろにし続けたことを恥じることなく）再会を大いに喜ぶ。こうした点も姫の心の温かさを示す。また、姫はこの父ばかりでなく、父と北の子ともたちになにくれと尽くしてやる。北の方はそうされてもしばしばひねくれぶりを発揮、素直に喜ぼうとしない。これがまた読む者を笑わせる。

従って作者は、（想像を逞しくすればだが）シンデレラ物語型の民間伝承を種に、これを発端としてまず女主人公をその恋人に救出させ、読者をまずは安心させておき、さてそれからの顛末を創作力の赴くままに事細かく紡ぎ出し、今日でも文学者の創作意欲を掻き立てて止まない、民話のめでたし、めでたしのその後はどうなった、という物語をみごと成立させたのである。

〔十一〕 考察

シンデレラ物語を構成するモチーフは結局以下のごとくになる。ただし、今日見出される全ての類話が全てのモチーフを含んでいる、とは限らない。

- ① 女主人公は継子であり、継母やその実の娘（たち）から苛められ、最下級の召使いのようにこき使われている。
- ② 女主人公の実の父親は存在するが、実子が苛めを受けていることには全く無関心。
- ③ 女主人公は妙な綽名をつけられている。これは「灰に関わる汚れ娘」といったものであることが多い。
- ④ 女主人公は美女であり、それは足が極めて小さい、という設定で端的に示される。
- ⑤ 女主人公には超自然的援助者が存在する。これが、必要がある場合、女主人公の望むものを何でも与えてくれる。あるいは、女主人公が継母やその実の娘（たち）から難題（これは家事労働を極端にしたものが多い）を課される場合、それを解決してくれる。
- ⑥ 女主人公は日常大層みすばらしく身を躰しているが、地域の何らかの晴れの行事の折（祭、舞踏会、祝宴など）に、援助者から与えられた豪華な衣装を纏い、優美でとても小さい履き物を履き、絶世の美女として登場する。そこを慌てて立ち去る際履き物を片方落とす。
- ⑦ 高い身分の男性がその履き物を手し、履き物の主と結婚したい、と望む。履き物の持ち主であることを同定するのは、それを履く、というテスト。
- ⑧ 女主人公は、履き物を履く、というテストをなかなか受けられない。継母やその実の娘（たち）がこれを阻害

し、場合により自分たちがそのテストを受ける。

⑨ 女主人公は最後にテストを受けることに成功。履き物の持ち主であることが同定されて、高い身分の男性と結婚する。

⑩ 継母やその実の娘（たち）に懲罰が加えられることがある。

シンデレラ物語の最も重要なモチーフは「小さな足とそれが合う履き物」であろう。この履き物は脱げ易いものでなければならぬが、脱げ易くはあつても日本の草履や下駄のようにほとんど開放型の構造だと、これを履けることが持ち主を同定するテストは成立し難い。⁽¹⁰⁾

A・B・ルートはこう述べている。「所有者の女性の美しさの証とされる小さな靴は、しかしながら、それが足と同じ寸法の底を持つ履き物であることを前提とする。けれどもゲルマン人のそれのような履き物——足の周りに巻き付けられた獣皮の切れ端——ではとてもこの種の物語の要因にはならない」⁽¹¹⁾。

となると、中近東のサンダルや南欧のスパルト底靴 *esparto*、縄底靴 *espadrille* のように、足型に合ったきちんとした底がありはするが、かなり浅い履き物が適合する。もつとも、爪先と踵はいくらか覆われているか、幅広の帯ないし細い紐 ^{ストラップ} が足の甲と踵を固定するものであつて欲しい。

あえて仮説を立てれば、シンデレラ物語はこうした履き物が一般的だった地域から発祥したのであろう。（しかし、シンデレラ物語のもう一つの大きなモチーフ、女主人公の綽名が暖を取るために灰だらけになることに由来すること、と、インド・中東などの暑い気候が生んだであろうサンダル型の履き物とをどう結び付けるつもりか、と詰問されたら、論者は途方に暮れるばかりなのだが）。

日本との関係について更に仮説を単純に推し進めれば、右のような地域から「海上の道」という大交易路を経由して南中国にまで伝播し、『西陽雜俎』など書籍を介することもあつて朝鮮半島にまで流布、彼の地で口承されたが、日本では重要モチーフが風俗上受け入れられないまま大幅に変形して類話とは言い難いものとなった、と結論し得るか。

注

- 1 物語の研究という題目に関しては、多くの異なった見解が提唱され得る。後述『シンデレラ・サイクル』第一章。
- 2 C・W・フォン・シドウ カール・ヴェルヘルム・フォン・シドウ Carl Wilhelm von Sydow (一八七八—一九五二)。スウェーデンの民俗学者。フィンランド学派の民話研究者。ルンド大学教授。
- 3 『民間説話』*The Folktale* Stith Thompson: *The Folktale*. The Dryden Press, New York 1946. 邦訳。ステイス・トンプソン著／荒木博之・石原綏代訳『民間説話 ―理論と展開―』現代教養文庫、社会思想社、昭和五十二)。ただし絶版。
- 4 ……と指摘している。前掲書(上)二七九ページ。
- 5 六つの話「失踪した女房を探す男」(AT四〇〇)「シンデレラ」(AT五一〇A)「鳥と馬と王女」(AT五五〇)「脊囊と帽子と角笛」(AT五六九)「盗みの名人」(AT一五二五)「金持ちの百姓と貧乏な百姓」(AT一五三五)。
附言すれば、日本ではこの六つの話の類話はほとんど見当たらない。
ただしAT四〇〇は「天人女房」(大成一一八。関敬吾編著『日本昔話大成』、角川書店、昭和五十三、第二巻)として沖縄県、奄美大島など南島に発見される(華南・華中からの伝播を示唆するか)。またAT一五三五はH・C・アンデルセン作の物語「小クラウスと大クラウス」Lille Claus og Store Claus [その故郷であるアンマークはフーン島の民話を基とした由を作者自身が記している。当該民話は「大きなあにいと小ぢなあにと」Store Bror og Lille Brorとされるが、論者は未確認]の尾崎紅葉による翻案「二人探助」(一八九一)により日本に流布し、新日本民話となった。すなわち書籍記載の物語が民間に入って口承化されたのである。この経緯の考究およびアンデルセンの民話の再話について詳しくは、鈴木満著『昔話の東と西 比較口承文芸論考』(国書刊行会、平成十六)の一章——アンデルセン「小クラウスと大クラウス」から民話「馬喰八十八」まで——を参照のこと。
- 6 マリアン・ロウルフ・コックス『シンデレラ。シンデレラ、猫っ皮、蘭草頭巾の三五〇の類話』Marian Roalhe Cox: *Cinderella*.

- Three Hundred and Forty-five Variants of Cinderella, Catkin and Cap o' Rushes, Abstracted and Tabulated.* David Nutt for the Folklore Society, London, 1893. 初出「民俗学会雑誌」三十一卷(一八九二) Publications of The Folklore Society (vol. XXXI) 1892。本邦未訳。
- 7 マンナ・ビルギッタ・ルートの研究「シンデレラ・サイクル」Anna Birgitta Rooth: *The Cinderella Cycle* CWK GLIERUP, Lund 1951. これは英文で書かれたルンド大学博士学位請求論文 Dissertation だが、当時も現在も高く評価されている。A・B・ルートはルンド大学でC・W・フォン・シドゥウの下に学び、のちウプサラ大学教授。
- 8 ……その伎倆と完璧なことに深く感銘を受けた 前掲書序章 Introduction。
- 9 『世界のシンデレラ物語』 山室静著『世界のシンデレラ物語』(新潮選書)、新潮社、一九七九。
- 10 マンティ・アールネ Antti Amatus Aarne. 民話研究の地理・歴史学的手法を提唱したフィンランドの民話研究者ユリウス・クロン Julius Krohn とその息子カール・クロン Karle Krohn の弟子。二人の手法を更に発展させ、できるだけ多くの民話を集め、類話を系統立てて編集、話型索引を作成しようとした。その成果が一九一〇年出版の『専門領域における知友各位の支援を受けし昔話話型索引』 *Verzeichnis der Märchentypen mit Hilfe von Fachgenossen*。
- 11 A T アールネ／トンプソン『民話の話型』 Antti Aarne / Stith Thompson: *The Types of the Folklore*. Suomalainen Tiedekatemia. Academia scientiarum Fennica. Helsinki 1964. 民話の話型一覧が番号付き・粗筋付きで掲載されている。従ってA T番号は世界的承認を受けている民話整理番号 (S. Thompson : *The Folklore* の邦訳『民間説話』の巻末に話型と番号掲載)。もともと現在口承文芸研究者間においてはA Tの増補改訂版であるA T U (後掲注「A T U」参照) が用いられている。
- 12 A T U ハンス・ライエルク・ウター『国際的民話の話型』 Hans-Jörg Uther: *The Types of International Folktales. A Classification and Bibliography*. 3 Vols. Academia scientiarum Fennica. Helsinki 2004.
- 13 五一〇「シンデレラと驢馬皮」 510 *Cinderella and Peau d'Âne*
- 14 五一〇A「シンデレラ(チェネレントラー、サンドリヨン、アッシュンブツテル)」 510A *Cinderella. (Cenerentola, Cendrillon, Aschenputtel)*
- 15 五一〇B「驢馬皮」(以前の「すなわちA Tにおいては)「黄金のドレス、白銀のドレス、星星のドレス(蘭草頭巾)」 510B *Peau d'Âne (Previously The Dress of Gold, of Silver, and the of Stars [Cap o' Rushes])*
- 16 五一〇B*「箱の中の王女」 510B* *The Princess in the Chest*
- 17 ストラボン? 前六三―紀元二一―二三年。ラテン語表記 Strabo。小アジアのアマセイアに生まれ、アレクサンドリアに学び、エ

- ジプト、ギリシア、小アジアを広く旅行した。紀元前二〇〇年以降はローマに定住、遍歴で得た知識を基に『地理誌』(Geographica 全十七巻)を著した。当時の世界地誌的知識・見解の集大成である。やはりギリシア人のプトレマイウス(いわゆるプトレマイオス)・クラウディオス・プトレマイウス(ほぼ紀元二世紀の人)と並び、古代地理学者の双璧とされる。
- 18 ヤーコブ・グリムによって夙に指摘されている ヤーコブ・グリム『小論文集』第二卷三八九ページ以降(「花に由来する女性の名前」) Jacob Grimm: *Kleinere Schriften*. Bd.2. S.389f. (Über Frauentamen aus Blumen). Olms-Weidmann. Hildesheim/Zürich/New York 1991.
- 19 エジプトのピラミッドについてのストラボンの記事 以下の邦訳は、飯尾都人訳『ギリシア・ローマ世界地誌』Ⅰ・Ⅱ(龍溪書舎、一九九四)による。Ⅱ第一七卷「リビュア大陸」第一章「エジプト」三三三「三大ピラミッド」。
- 20 この靴に合う美しい足 足が小さければ美女に違いない、と断じるのはなるほど迂闊な思い込みではあるが、なんとなくもつともらしい。足が小さい不美人も、足の大きな美人もいる道理とは申せ、小足を美女の条件に数えることは日本でもある、あるいは、あった。少なくとも元禄時代には。「美人両足は八文七分に定まれり」とか「足は八もん三分に定め、親指反てうらすきて(足の裏がすいている。扁平でない)」とは井原西鶴の言葉(それぞれ井原西鶴著『諸艶大鑑』巻七の(二)、「好色一代女」巻一の(三))である。一文は約二・四センチだから、八文七分でも二センチ足らずとなる。八文三分ならば二〇センチに満たない。ちなみに、「親指反てうらすきて」と西鶴が形容しているのは、弓なりにきゅつと反った足であろうが、こうした足の女人は、理想的な女性器の持ち主でもあるそう。そこで「弓鞋」なる弓型の小さな履き物とともにしばしば性的問題に関連して解説されることのある中国のかつての習俗「纏足」にも僅かに触れておく。これを考案したのは(俗説では)北宋に滅ぼされた五代南唐の後主李煜(九三七—七八)とされる。北宋(九六〇—一二二七)以降徐々に広まり始めたようである。庶民に至るまでこの悪習に浸ったのは清代であろうか(清朝の支配階級である満州(女真)族および漢軍八旗の家族は本来これを行わなかった)。
- 21 『歴史』ラテン語文字転記 *Historia*。邦訳。青木巖訳『歴史』上・中・下、創元文庫、創元社、昭和二十九。松平千秋訳『ヘロドトス 歴史』(改装版)上・中・下、岩波文庫、岩波書店、二〇〇六。
- 22 ジャンバッティスタ・バジール著『お話の中のお話』(五日物語) Giambattista Basile: *Lo cunto delle cunti (Il Pentamerone)*。出版一六三四—一三六。ヴェネツィア人ジョヴァンニ・フランチェスコ・ストラパローラ著『榮しき夜』(一五五〇—一五四) Giovanni Francesco Strapalora: *Le piacevoli notti* などにも民話伝承の歴史にとってヨーロッパで最も重要な役割を果たした二つの説話(ノヴェラ *novella*) 集の一つ。純粹の口承民話や、元は書かれたもの(記載民話)でも既に当時のイタリアの民間伝承になっていたのを、ナポリの行政官、文人バジールが愛する郷土の言葉ナポリ方言を用いて書物とした。バジール(一五七五—一六三三)

は元來軍人として多年ヴェネチア共和国に勤務したので、この共和国の中近東貿易を保護するヴェネツィア海軍の補給基地が点在していたアドリア海沿岸の民話をも数多く知った」と思われる。また「ナポリNapoliの語源は古代ギリシアの植民都市ネオポリスNeapolis（これがローマ風にネオポリスNeopolisとなった。いずれも「新たな都市」の意）で、ローマに属してからも風儀は周辺とは変わっており、中近世以降イタリアの枢要な大都市であるのに、ナポリ方言は他地方のイタリア人にはよく分からない」とされた特異な地域である。

邦訳。杉山洋子・三宅忠明訳『ペンタメローネ「五日物語」』、大修館書店、一九九五。「灰だらけのニャン」La Gatta Cenerentola はこの邦訳では「灰かぶり猫」となっている。

なおこの邦訳は英語からの重訳だが、英語底本が明記されていない。

リチャード・バートン訳『イル・ペンタメローネあるいはお話の中のお話』Translated by Richard Burton: *Il Pentamerone; or the Tale of Tales*. 1893. rpt. New York, Bone and Liveright, 1937. →これは多分底本とは異なる。

ノーマン・ペンザー訳『ジャンバティスト・バジールのペンタメロン』Translated by Norman M. Penzer: *The Pentamerone of Giambattista Basile*. 2 vols. from the Italian of Benedetto Croce of 1925. rpt. Westport, Connecticut, Greenwood Press, 1979. →これが底本か。

右は一般のイタリア人にも難解なナポリ方言から標準イタリア語に訳されたベネデット・クローチエのイタリア語版からの英訳である。

信頼すべきイタリア語版で入手が容易なものは以下の通り。

Il Pentamerone ossia La Fiaba delle Fiabe. 3 vols. Tradotta dall'antico dialetto napoletano e corredata di introduzione e note storiche di Benedetto Croce. Prefazione di Italo Calvino, Euditori Laterza. 1974.

23 サルデーニヤ Sardinia. サルディニア島。地中海西部、コルシカ島の南にあり、シチリア島に次いで地中海第二の大島。イタリア領。属島を合わせ面積二四〇〇〇平方キロ。

24 竈猫^{かまねこ} 民衆の同じ民衆に対する謂われのない差別意識を悲しみかつ諷刺して宮澤賢治が書いた短編「猫の事務所」（初出一九二二）には「かま（竈、釜）猫」が事務所の最下級書記として登場する。賢治によれば、夏の土用、つまり暑い最中に生まれたので皮が薄く寒がりなため、しょっちゅう竈の暖灰の上に寝て薄汚れ、他の猫どもから差別される存在。こうした「かま猫」はあるいは賢治の創作かも知れないが、竈の傍にうすくまうて暖をとる猫は少なくても明治時代から「竈猫」と称されている（『日本国語大辞典』第二版、小学館）。大田南畝（一七四九—一八二三、蜀山人、四方赤良）の狂文集『四方のあか』に取られている「猫賦」に

は「冬来れば竈かまどに入いて、灰毛の名に負ふもをかし」とあるように、猫は昔から、洋の東西の別なく、寒い時期には竈に潜り込んで、毛を灰で汚すもの（＝「猫灰だらけ」）だったわけ。

ゼゾッラはろくな服も与えられず寒さに苦しんでいるので、台所の竈で暖を取るほかなく、灰だらけになっている。そこで継母と継母の連れ子たちにそうした蔑称で呼ばれる。

25 ラ・ガッタ・チエネレントーラ La Gatta Cenerentola 「ガッタ」はイタリア語で「猫」一般、あるいは「牝猫」「牡猫」は「ガット」gatto。「チエネー」cenera は「灰」。

26 棗椰子 椰子科の常緑高木。雌雄異種。高さは一五―二五メートル。葉は羽状でその長さは三メートルにも達する。実生五年目あたりから実を付けはじめる。樹齡はおおよそ百年だが、二百年に達することもある。暑熱、乾燥、砂塵、塩害などに強い耐性を持つ。中東、北アフリカでは極めて重要な果樹である。砂漠のオアシスで緑濃く風に揺れているのはこの木の林。材木（建材、燃料）も葉（帽子、敷物、籠、団扇の素材）も住民にとって有用だが、その果実（英語「デーツ」date）となると、熟した実はもちろん、乾したもの、粉末にしたものは、特に砂漠を行く隊商や木造船での航海者にはありがたい存在だった。長期間変質せず、カロリーが高く、主食とし得る。また、駱駝など家畜の飼料ともなる。直径二―三センチ、長さ三―七センチの楕円球型。長さ二―二・五センチ、厚さ六―八センチの種子が一つだけ入っている。乾すと濃褐色となる。

27 木製の靴台 pianella。「ピアノッタ」は現代イタリア語では「スリッパ」、「上履き靴」だが、往事は靴に重ねて履く木履で、都市の街路に積もる泥濘を避けるためのものだった。こうした木履は三〇センチにも及ぶことがあった由。靴台は西欧では別に珍しいものではなく、英国では十九世紀半ばにおいてさへ言及がある。たとえば、英国の大作家チャールズ・ディケンズの『デイヴィッド・コパーフィールド』Charles Dickens: David Copperfield（一八四九―一五〇）には、街路で女性たちの靴台 patterns がうるさい音を立てると記されている。この場合は、靴の下に紐で括りつける小さな丸い輪で、これを履くと靴は泥濘から数インチ（一インチ＝二・五四センチ）離れることができる。中近世のヨーロッパ諸都市の街路は、舗石が敷き詰められていても、周辺の耕牧地帯から持ち込まれる泥、都市の自家から出される塵芥、寝室用便器から棄てられる尿、市壁内で放し飼いにされている豚などの家畜の糞尿が堆積していることが多かった。

28 Cendrillon 「灰」cendreの縮小形。「灰だらけっ子」。ドイツ語の「アッシュエンプテッル」Aschenputtel「アッシュエンブレデーデル」Aschenbrödelに当たる。これは王侯の宮殿や大貴族、大商人の邸宅、あるいは大旅館の厨房で働き使われる下働きのごぞう。奉公人の序列としてはじんじりで、賃金は無いか、もしくは無きに等しく、ふんだんに頂戴するのは足蹴やびんた。寝床らしい寝床も与えられないのが普通だった。

29 verre ガラス。同じ発音 (verre) の veil (銀栗鼠 (シベリア栗鼠) の毛皮。中世ヨーロッパの上流階級の長衣ロウの裏や縁カノに用いられた) だったのを、出版の際印刷所で誤植されたのでは、との説もある。しかし、毛皮のように柔らかで、ある程度伸縮する素材でこしらえた靴では、それに合う小さい足の持ち主を見つかるテスト道具としては不適。一見合理的な異論だが、民話の本質を知らないための考え過ぎである。民話は輪郭が明確で硬質かつ単純な物を好む。従ってガラスの上履き靴でよい。

30 いわゆる「ペローお伽話」・「ペロー童話」正式名称は本文にもあるように以下の通り。「過ぎし昔の物語あるいはお伽話、ならびに教訓」またの名「鷲鳥おばやんのお伽話」(一六九七) Charles Perrault: *Les Histoires ou Contes du temps passé. Avec Moralitez* (= *Moralités*) / *Contes de ma mère l'Oye* (= *l'Oie*)。フランスの民間伝承を素材として、フランスの法律家、官僚、学者 (一六七一年以降アカデミー・フランセーズ会員)、文人だったシャルル・ペロー (一六二八—一七〇三) が典雅なフランス語で再話し、教訓を附したものの。KH Mは「本になったメルヒェン」Buchmächenとの呼称がふさわしいであろうが、こちらは「個性メルヒェン」Individualmächenと呼んだ方がよろしかろう。韻文三編、散文八編が収められている。附された教訓から、読者としては中・上流階級のうら若い令嬢たちが念頭に置かれていることが分かり、幼い子ども向けとは言えないので「お伽話」・「童話」という呼称は適切ではないが、日本ではこれが通り名ゆえにむを得ないか。

邦訳。新倉朗子訳『完訳ペロー童話集』、岩波書店、一九八四。新倉訳は後書きが資料としても優れている。他には巖谷國士訳『完訳ペロー昔話集』(ちくま文庫、筑摩書房、二〇〇二) などがある。

31 ……可能性は少ない。ただし、当時既にフランス語訳があったのなら話は別だが、この点未詳。

32 女の名付け親(代母)の妖精 シンデレラ型女主人公の援助者として妖精が現れるのは比較的稀な例。これはペローの創作かも知れない。であるとすれば、ペローは、十七世紀中頃からフランスの中流・上流階級の女性物語作者の間に流行し始めた、妖精を狂言回しする「妖精物語」conte de féesの形式に倣ったのであろう。なお「名付け親」とは、西欧ではカトリック教会や英国国教会(聖公会)において、幼児洗礼の際儀式に立ち会って、この子をキリスト教徒として育てます、との証人になる男性ないし女性(複数のこともある)のこと。その子にとっては、両親同様、あるいは場合によってはそれ以上に近しい存在であり、名付け親もその子が幸せに暮らして行けるよう心遣いをするものだったのである。

33 オーノア夫人作『新小説あるいは当世風妖精たち』(別名「名高き妖精たち」) オーノア夫人 Madame d'Aulnoy、すなわちオーノア伯爵夫人マリ・カトリーヌ・ル・ジュメル・ド・ベルヌヴェイユ・ド・ラ・モット Comtesse d'Aulnoy, Marie Catherine Le Jumel de Berneville de la Motte (一六五〇—一七〇五) は、その回想録や小説よりも創作妖精物語である『新小説あるいは当世風妖精たち』(別名「名高き妖精たち」)(六巻。一六九八—)で今日知られている。

- 34 人食い鬼 オウグール ogre. 女性形は鬼婆(オグレス) ogresse. 英語のオウガール ogre はこれから。
- 35 KHM (いわゆる『グリム童話集』) ドイツ語の正式名称は *Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm* (『グリム兄弟によって集められた子どもと家庭のための昔話集』)。初版第一部は一八二二年、初版第二部は一八一五年出版。第二版は一八一九年。以下改訂・補足を経て最終の第七版は一八五七年。ゲルマニストのヤーコプとヴィルヘルムのグリム兄弟 Jacob Ludwig Carl Grimm (1785-1863) / Wilhelm Carl Grimm (1786-1859) によって収集、編纂された民話集。聞き書きの手法により採録されたものもあるが、近世以降の物語集から筆写された話も少なくない。兄弟は、ドイツ人の精神が民話の中にこそある、との仮説に基づいて研究を始めたのであって、決して児童向けを意図したわけではなく、また、言うまでもなく、グリム兄弟が創作したのではない(編輯の際兄弟、特に文人肌の弟のヴィルヘルムが、民話にしばしば見られる淫靡、猥雑、粗野な、あるいは、そう思えた箇所を和らげたり削除したりするため、加筆しはしたが)。従って、『グリム童話集』なる名称は二重の意味で誤解を招くので、好ましくない。よって本論ではドイツ語の正式名称の頭字を取った、世界的に承認されている略称「KHM」を用いる。
- 36 最も知られたものの一つで、至るところで語られてくる gehört unter die bekanntesten und wird aller Enden erzählt.
- 37 二人の娘 いずれも女主人公より年上かどうか不明。「一番上の」die älteste「末の」die jüngste という最高級が用いられている。故に女主人公を加えて、とも考えられる。それだと、女主人公が真ん中、となる。しかし三人娘の場合、末娘が最下級されるのがヨーロッパでもアジアでも民話の常道(二人娘では姉が継子、妹が後妻の妾子となるので、当然姉が女主人公だが)で、真ん中が幸せになる、でよいのか気に掛かる。KHM 一三〇「二つ目」二つ目「三つ目」KHM130 Einäuglein, Zweiäuglein und Dreiäuglein は真ん中の「二つ目」が女主人公で、継子ではないのに実の母親と実の姉妹に苛められる奇妙な話だが、これが訛伝であることは、ロシアの類話から類推される。ロシア民話では、連れ子姉妹が一つ目、二つ目、三つ目で、女主人公は継子なのである。また、俗語では「年上の」die ältere「年下の」die jüngere という比較級の代わりに、上記のような最高級が使われることがあるから、こうした最高級は単に「姉」「妹」を指し、女主人公は入っていない、とするのが妥当か。ただし、後述の「落窪物語」の女主人公「落窪の君」は継母の実の娘である「三の君」と「四の君」の間の年齢のようだ。注「腹違いの姉妹たちである三の君と四の君」参照。
- 38 アッシェンブッテル Aschenputtel. 「灰」「燃え殻」という意味の「アッシェ」Asche と「のらくら者」くらしいの意味の「ブッテル」Puttel から成る合成語。el は縮小語尾。「アッシェンブレーテル」Aschenbrödel も同義。もともとは厨房でこき使われる下働きの「おやう」の呼称。前掲注「Cendrillon」参照の「おやう」。
- 39 扁豆 Linsen. ヨーロッパや中近東で日常食べられる豆の一種。西アジア原産で古代エジプトで既に食用とされていた。旧約聖書

- にも出る(創世記二十五章三十四節)。かなり扁平な凸レンズ状。レンズ豆、あじまめ、レントゥル lentil、ランティユ lentille。直径四―九ミリ(すなわちごく小さい)。人間の目と指で虫喰いや未熟な豆を選び出すのは難儀なことだったろう。
- 40 難題 これは単に意地悪のための課題だが、家事の一つとして、豆類や雑穀の選別は時間の掛かる、しかしやらねばならない女性の仕事だった。民話に出て来る難題の多くは、それが女性主人公に課される場合、女性の家事労働を極端に誇張したもので、男性主人公に課される場合、男性の屋外での仕事(樹木の伐採など)を極端に誇張したものである。
- 41 悪いのは餌袋へ／＼いのはお鍋の中へ Die schlechten ins Kröpfen / die guten ins Töpfchen.
- 42 鳩小屋 Taubenschlag. 食肉用の鳩を飼うための塔状の建物[ただし現代ドイツの Taubenschlag は低層の小屋]。農民でも豊かな層は所有地内に建てていた。ただし、本来そんなに高い塔ではないし、仮に高い塔であっても、ここから王宮の大広間の中が見えるはずはなく、無理な設定である。
- 43 蚕豆 Wicken. 英語 wetch と同語源。「カラスノエンドウ」「ヤハズノエンドウ」「スイートピー」などの訳があるが、ソラマメ属であり、食用なので、こう訳しておく。「蚕豆」はドイツ語では普通「ザウボーン」Saubohne(雌豚豆)。完熟したものを莢から出し乾燥させた食材。不足し勝ちの穀物を補う食材の一つとして重要だった。KHM 一八「麦藁と炭と豆」Strohalm, Kohle und Bohneの「豆」は明らかに蚕豆である。この話では田舎住まいの貧しい老婆が粥にする。
- 44 お母様のお墓の木のところに行って、揺さぶって、綺麗な衣装が欲しい、と願い事をなさいな。でも、真夜中にならないうちに戻るんですよ Geh zu dem Bäumlein auf deiner Mutter Grab, schüttlele daran und wünsche dir schöne Kleider, kann aber vor der Mitternacht wieder.
- 45 かわいい木、ゆいゆいと揺れとくれ。／綺麗な衣装を投げとくれ。 Bäumlein, rüttel dich und schüttel dich / wirf schöne Kleider herab für mich
- 46 上履靴 Pantoffel. イタリア語のパントフォラ pantofola(スリッパ、上靴)から。フランス語ではパントゥフル pantoufle(スリッパ、部屋履き)。現今では、足の甲を覆う短い爪皮は付いているが、踵皮は無い。この型だと多少足の長さがあっても履けるので、「シンデレラ」物語には不適合である。
- 47 かわいい木、ゆいゆいと揺れとくれ。／衣装をまたまた取っとくれ。 Bäumlein, rüttel dich und schüttel dich / nimm die Kleider wieder für dich!
- 48 豌豆 Erbsen. 完熟したものを莢から出し乾燥させた豌豆はごくありふれたドイツ人の食材。たとえば、煮て裏漉しし、ソーセージを実としてスープにした「エルブセンズッペ」Erbsensuppe はどろりとしているが美味。英国の「ピー・スープ」pea soup も有

名。

49 松脂 Pechi. ドイツ語「ベック」Pech, 英語「ピッチ」pitch。「樹脂ピッチ」と新釈してみた。ちなみに金田鬼一訳「完訳グリム

童話集」(岩波文庫、岩波書店)所収三番「灰かぶり」では「瀝青」、野村法訳「完訳グリム童話集」(ちくま文庫、筑摩書房)所収二番「灰かぶり」では「タール」と訳されている。そして「ベツヒ」にはもちろん「瀝青」「タール」の意がある。論者はこの両先達の解釈にあえて強く異を唱えるものではない。しかしながら、この物語の場合「樹脂ピッチ」と解する方がいくらか適切ではないか、と考える。「松脂」とごく一般的表現にしたのは、不正確でも民話により相応しいようにとの配慮からである。

ちなみに、ドイツ語には「テアア」「ゲ、英語には「ター」「ピ」なる語があり、言うまでもなくこれは日本語の「タール」である。これがここで用いられていれば問題ない。しかし、「ベツヒ」「ピッチ」には「タール」の他に「樹脂」の意もある。

木材を乾留すると、木炭の副産物としてピッチとタールが得られる。このピッチとタールはしばしば混同されるが、タールは液体であり、ピッチは固体に近い性質を持つ点で異なる。ただし民話の世界では厳密に分けられてはいなかったであろう。瀝青は本当はピッチを指すようだが、タールの別名と考えられても、あながち咎め立てするには及ぶまい、と存ずる。そこで、瀝青、タール、ピッチを引つくるめて、真つ黒(参考。ドイツ語「ベツヒ・シユヴァルツ」pechschwarz = 英語「ピッチ・ブラック」pitchblack = フランス語「プア・ノール」poix noire なる形容詞——いずれも「ピッチのように黒い」「真つ黒な」の意——がある)で、臭気の強い、常温で粘稠な液体ないしべたべたする固体、とごく大雑把に受け取っておこう(理化学系専門家各位には一介の口承文芸研究者のこうした好い加減な解釈をなにとぞご海容戴きたく、併せて深くお詫び申し上げる)。中・近世ヨーロッパでは、石炭を乾留してコークスを作る際の副産物であるコールタール、石油精製の課程で出る副産物の一つであるタール、ピッチ——これらは正確には「アスファルト」(「土瀝青」)——は一般には知られていなかった(ただし、中近東においては天然自然のアスファルトが溜まっている穴が少なくなく、容易に採取され得たので、古代エジプトなどで葦船の防水塗装、ミイラの防腐処理その他に利用された。旧約聖書に記されている「バベルの塔」の煉瓦の接着剤、「ノアの箱船」の塗裝材料、モーセが赤児の折入れられた籠の塗裝材料もこれ。またコールタールは中世ヨーロッパでも存在はしたが、大量に産出されるようになったのは産業革命以降である)が、都市住民の屋内炊事・暖房用燃料として煙を出さずかつ焰を上げない木炭の製造(すなわち木材の乾留)が盛んに行われていた(樹木の伐採で生計を立てる人人、すなわち木樵としては、重い薪を近隣の都市へ毎日運搬するよりも、森の空き地で木炭とし、軽量なそれを多量に纏めて売りに行く方が遙かに合理的だったはずである。民話への反映としては、たとえば、KH M四三「トゥルーデおばさん」Frau Trudeでは「真つ黒な男」が「炭焼き」Köhlerとして説明され、KH M五四「背囊と帽子と角笛」Der Ranzen, das Hütlein und das Hörnlein には森の中で孤独に木炭作りをしている煤だらけの「炭焼き」が登場する)から、

その際の副産物であるタール(ピッチ・瀝青^{アスファルト})は極めてありふれていた。これらは木造帆船の船体・船具・帆綱・錨綱などの防水・防腐剤として大量に需要があったし、内陸部でも木製家具、木の柵、杭などの塗料として身近に存在したのである。

ところで、松、樅など針葉樹の樹液(いわゆる「松脂」)を蒸留して作られる白色、黄色、褐色、ないし黒褐色の物体である樹脂は日本では普通ロジン(英語・rosin)と称する。これは常温ではガラス状の固体で、かつて船舶の木造甲板の防水、滑り止めに用いられた。また、溶かして靴などを縫製する際の防水・接着剤ともした。蒸留の過程でテレピン油も得られる。ロジンは今日でも接着剤、滑り止め(舞踏場の床、ヴァイオリンの弓などに塗る)等々の原料である。この物質をもドイツ語圏で「ペツヒ」、英語圏で「ピッチ」と称し、ロジン精製の課程で揮発成分であるテレピン油が抜け出ない内は粘稠な液状を呈する、すなわち「樹脂ピッチ」と名付け得る状態のことがある。この物語で王子が階段に塗らせたのはロジンではなからう。ロジンはなるほど滑り止めではあるが、べたべた粘着するものではない。一方「樹脂ピッチ」なら「灰かぶり」(アッシェンブツテル)の靴はくつつくに違いない。

タール(ピッチ・瀝青)、あるいは樹脂ピッチ、どちらが語り手のより身近にあったかで、この場合の「ペツヒ」の帰趨が決まるうか。針葉樹資源に恵まれた北欧からは、中・近世、大量のタール(ピッチ・瀝青)とロジン、テレピン油が英国、フランスなどに輸出されていたから、双方ともドイツ語圏の庶民は見慣れていたことだろう。だが、論者としては以下の属性にも触れたい。すなわち、タールは真つ黒な上臭い。樹脂ピッチは最も濃い色でも黒褐色で、かつ芳香がある。王宮の階段に塗布するには後者の方が相応しいのではあるまいか。

ただし、KHM二四「ホレ夫人」(「ホレのおばさん」「ホレさま」) Frau Holle で性格の悪い娘に掛けられるのは(真つ黒けな)「タール」でよろしからう。たとえば、ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著『ドイツ昔話集』Deutsches Märchenbuch 所収のその類話DMB一一「黄金のマリアアと瀝青のマリアア」Die Goldmaria und die Pechmaria——鈴木満訳・注・解説『ドイツ昔話集』(二八五七)試訳(その一)、武蔵大学人文学会雑誌第四十巻第四号、平成二十一年三月、所載——には二つの門が出て来て、一つは「瀝青のように真つ黒け」Pechschwarz と明記されており、この門から出ざるを得なかった悪い娘にたつぷりこの「ペツヒ」が掛かることでもあるし。

50
しかし、だれにもとつても小さ過ぎた。いや、二つ分の上履き靴が一つになつていたとしても、たいいの人は足さえ入れることができなかつたらう。Aber allen war er viel zu klein, ja manche hätten ihren Fuß nicht hineingebracht, und wären zwei Pantoffel ein einziger gewesen. なお、吉原高志／素子訳『初版タリム童話集』(白水社、一九九七)では該当箇所が訳出されていなく。

51
うしろをござらん、うしろをござらん。／お靴の中には血が一杯。／お靴がちっちゃ過ぎるもん。／ほんとの花嫁、まだおうち。

- Rucke di guck, rucke di guck! / Blut ist im Schuck (Schuh): / Der Schuck ist zu klein, / die rechte Braut sitzt noch heimlich
 52 重^{おも}い靴^{くつ}・Schuhを den schweren Schuh. 決定版では「足を重^{おも}い木靴^{きくつ}から aus dem schweren Holzschuh」とある。決定版の後掲
 訳注「木靴」参照。
- 53 左足から von dem linken Fuß. これで漸^{おそ}く脱^はげ落ちた上履^{じやうふ}き靴^{くつ}が左の片方であることが分かる。決定版では既に王宮でこのこと
 が示される。しかしながら靴のテストでは左右どちらとも語られない。
- 54 うしろをこらんな、うしろをこらんな。／お靴^{くつ}の中に血^ちなんてないよ。／お靴^{くつ}はちっちゃ過ぎないもん。／ほんとの花嫁連れてく
 わえ。 Rucke di guck, rucke di guck! / Kein Blut im Schuck: / Der Schuck ist nicht zu klein, / die rechte Braut, die führt er
 heimlich
- 55 KHM決定版 第七版。一八五七年出版。兄弟が共に生存していた(ヤークコプは一八六三年、ヴィルヘルムは一八五九年死去)時
 に出版された最後の版。以降ヤークコプ単独による改訂は行われなかったので、第七版を決定版と称する。前掲注「KHM(いわゆ
 る『グリム童話集』)」をも参照のこと。
- 56 榛^{はせみ} ハーゼル Hasel. 樺^{かほ}目^め樺^{かほ}の木科榛^{はせみ}属^{ぞく}の落葉低木である西洋榛^{はせみ}。高さ五―七メートル。葉は広く、ほぼ円形で先端^{せんぽん}が急に尖^とる。
 春開花する。雄花は黄褐色^{おうこくしき}、雌花は紅色^{こうしき}。果実(堅果)は葉のような総苞^{そうほう}によって下部を包む。英語の「ハイゼルナッツ」
 hazelnuts。丸い団栗^{だんぎ}のような大きな球形^{けいけい}。殻^{から}は固^{かた}いが、中の真^まっ白^{しろ}な仁^には脂質^{じしつ}に富み、独特^{とくとく}の風味^{ふうみ}があり、菓子材料^{かしざいりょう}やワインの
 つまみなど食用になる。この木はドイツ語圏ではありふれており、古代^{こたい}から民衆^{たみしゆ}に親しまれ、生け垣^{なまきり}などにされる。
- 57 二人の娘 いずれも女主人公より年上かどうか不明。初版と同じく「一番上の」die älteste、「末の」die jüngste という語が用いら
 れている。しかし「義姉」と訳しておく。
- 58 木靴 hölzerner Schuhe, Holzschuhe. 日本ではオランダの木靴^{きくつ}・Klompfenが知られているが、もとより英国およびヨーロッパ各地
 にある(あるいは、あった)。木材^{もくざい}を刮^かり抜^ぬいて靴^{くつ}の形にしたもの(底だけが木製のものもある)で、かつては普通裸足^{はだかあし}に突^つっかけ
 て履^はいた。農民、都市の庶民^{しやくみん}の履^はき物^{もの}。木製なので当然重^{おも}い。馴^なれないと履^はき難^{がた}いことはいうまでもなく、舗石^{ほせき}の上^{うへ}ではがたごと
 大きな音を立て、優雅^{えいあ}でないこと夥^{おほ}しい。が、水や泥には強い。
- 59 かわいい木、ゆっなゆっなと揺れとくれ、／黄金^{おうごん}と銀^{ぎん}とを投げとくれ。 Bäumchen, rüttel dich und schüttel dich, / wirf Gold und
 Silber über mich.
- 60 左 ヤークコプ・グリムはその著『ドイツ法律故事誌』Deutsche Rechtsaltertümerの中で「ゲルマン人の婚姻風俗に靴の着用のこと
 がある」と記している。これだけでは何のことか分からないが、次の記述(論者訳)はそれを補足説明しよう。

古代ドイツの習俗によれば、靴も婚約の象徴として用いられた。花婿は花嫁に靴を与え、彼女がそれを履くやいなや、彼女は花婿の力に屈従したものと看做される。また、ある資料にはこんなことが見える。「ある地方では、花嫁が左の靴の留め金を花婿に嵌めてもらうと、彼女は家を支配する（＝主婦として家政を切り回す）であろう、と信じている」。この古い民間信仰が灰かぶりの靴に反映している。王子は彼女に左の靴を渡す。そして花嫁として城へ連れて行く。おそろく元は、花婿が自分の靴を脱ぎ、それを花嫁が履かねばならなかった、という習俗らしい。▽出典。アントニー・テプファー「ドイツの民話における王」*Antonie Töpfer: Der König in deutschen Volkmärchen*. Jena Universität. Dissertation. 1930. (イェナ大学博士学位請求論文)

なお、古代中国の周王朝（紀元前十一世紀、武王が殷を滅ぼして建国。三七代八六七年に及ぶ）でも婚礼で履き物が重要な役割を演じた。以下の記事は『周礼』（周の官制を説明した書。一名『周官』。十三経の一つ）に基づく。「――」内は論者の補足。

当時、諸侯の親迎の礼（当日の夕方に花婿自身が花嫁の親許に赴いて妻を迎える礼）では、婿は履二足と瑞玉を女家（花嫁の親許）に贈って、「母が私に粗末な玉と履を持たせて、夫人と息女に贈らせました」と言う。夫人は「娘の教育も充分にできていないが、嫁いで後は必ず慎んで仕えるでしょう」と答えて瑞玉を受け、履を娘に履かせて、これに「よく舅姑に仕えて真心を尽くし、帰ってはなりません」と言って、娘の手を引いて夫に渡す。（中略）また、大夫（周代の官名。諸侯の重臣）・士・庶人の場合には、履二足に束脩（脯（＝干し肉）を束ねた贈り物）を贈り、自分の父は、某の父とか某の師父とか呼び、相互の挨拶の言葉は、大體前と同様である。諸侯から士庶人まで、親迎の贈り物は、玉とか束脩を身分によって持参するが、履二足だけは貴賤共に必ず贈る。女が車に乗る時に、その母が履を履かせるのも貴賤同じであるが、履は女に履かせるためにわざわざ男の家で調えたものであつて、玉や束脩のように形式的な礼物ではないからである。衣服や頸飾りでなく履を贈ったのは、新婦が門に入れば第一に踏む（躡む）履いて歩く）ものであるから、特に重んじたのであろう。（尚秉和著・秋田成明編訳『中国社会風俗史』（東洋文庫、平凡社、一九六九）二三五―二三六ページ）

61 小さく、優美で、全部黄金 er war klein und zierlich und ganz golden.

62 うしろをいらんな、うしろをいらん。／お靴の中には血が一杯。／お靴がちっちゃ過ぎるもん。／ほんとの花嫁、まだおうち。

rucke di guck, rucke di guck. / Blut ist im Schuck (Schuh). / Der Schuck ist zu klein, / die rechte Braut sitzt noch heim.

63 死んだ妻から生まれたちっぽけなづき損ないの灰かぶりしかもうおりません。 nur von meiner verstorbenen Frau ist noch ein

kleines verbuttetes Aschenputtel da:

64 うしろをこらんな、うしろをこらん。／お靴の中じゃ血なんてないよ。／お靴はちっちゃ過ぎないもん。／ほんとの花嫁連れてくわえ。 rucke di guck, rucke di guck / kein Blut im Schuck: / Der Schuck ist nicht zu klein, / die rechte Braut, die führt er heim.

65 段成式 唐代の官吏、文人。？一八六三年。憲宗、穆宗皇帝の宰相段文昌の子。父親の功で高級な官職を歴任。詩人としても高名。李商隱、温庭筠と並び称される。

66 『西陽雜俎』(『西陽雜俎』)に収められている 邦訳。段成式撰・今村与志雄訳『西陽雜俎』、東洋文庫四〇一(平凡社、一九八二)。第四卷、続集卷一支諾臯上、八七五番。

67 世界最古の完全な文獻シンドレラ譚 このことを初めて指摘したのは博覧強記の大博物学者にして民俗学者南方熊楠(一八六七—一九四一)である。南方熊楠著『南方熊楠全集』第二卷(平凡社、昭和四六)、一一一ページ以降(西暦九世紀の支那書に載せたるシンドレラ物語)。初出。明治四四(一九一一)年三月『東京人類学会雑誌』二六卷三〇〇号。

68 李雲鶴校訂本 唐段少卿撰・李雲鶴(明)校『西陽雜俎』、上海商務印書館、一九三七。

69 方南生点校本 唐段成式撰・方南生点校『西陽雜俎』、中華書局、一九八一。

70 秦漢 秦代は紀元前二二一—紀元前二〇六。漢代は前漢が紀元前二〇六—紀元八、後漢が二五—一二〇。

71 洞主 「洞」は古代から近世までの中国における南方諸民族の集落単位。近世では、たとえば、清代の袁枚(号随園。一七一六—九七)著『子不語』(邦訳。手代木公助訳『子不語』全五卷(東洋文庫)、平凡社、二〇〇九—一〇)に出る(卷十八「黒苗洞」(連続番号四八三)。「子不語」の訳者がなぜ誤解しているように「洞穴」ではない。従って「洞主」は「村長」「部族長」「領主」ほどの意。

72 金を淘ぐ 文語「よなぐ」・口語「よなげる」は、細かい物を容器に入れ、水を注ぎ、揺り動かして重い物を澱ませ、必要な物と不要な物とに選別すること。各地方言で、「米や小豆などを水に入れて掻き回し、砂、小石などを取り除く」の意にも用いる。葉限の場合、こうして砂金を採取したのである。「鉤す」なら「採掘する」の意。

73 二寸余 一寸は約三・〇三センチ。

74 日に長じ このように毎日どんどん大きくなるのは神秘的な存在であることを示している。『西陽雜俎』八七三話(『続集第一支諾臯上』所収)の「金哥」(瘤取話)の類話)でも、日に一寸余り大きくなる蚕が出て来る。旬日後には牛ほどになる。

75 襦 腰までの短い上衣。「襦袢」から連想されるように上体を覆う肌着ではない。

- 76 里。古代中国周王朝の一里は五四〇メートル。しかし唐代では四〇〇メートル余が一般か。もつとも近世に至るまで中国里は時代によりかなり変動がある（ちなみに現代中国の「市里」は五〇〇メートル）。従って「数里」を現代の距離でどのくらいと見積もればよいのか甚だ覚束ない。しかし、数里を仮に五―六里と考え、一里を仮に四〇〇メートルとすれば、二キロから二キロ半ほど。継母が口実を設けて継子にわざわざ水を汲み行かせる距離としてはまず妥当であろう。重い木製の水桶（もしくはもつとずつと重い陶器の水甕）を頭に載せて運ぶ、あるいは水桶を二つ天秤棒の両端に提げて運ぶとしたら、かよい少女の足では片道一時間半ほど、休息したり、水を汲んだりするのに要する時間を入れると、往復で四時間ほど掛かった、と考えられようか。これなら継母が魚を殺して処理する暇は充分ある。「数百里」では二〇〇キロから二五〇キロほどとなり、あまりにも理屈に合わない。
- 77 丈余。一丈は約三・〇三メートル。
- 78 糞棲。糞壤（堆肥）。厩舎の汚れた敷き藁、家畜の糞、台所から出る生塵芥などを積み重ねた山。農家の中庭に置かれた。醜酔して良い肥料となる。ただし臭気が烈しい。
- 79 被髮。「髪を被る」。髪の毛をざんばらにする。髪の毛を振り乱す。髪の毛を結わない。漢民族周辺の「野蛮な」民族の風俗をも指すが、ここでは仙人のような特異な存在を仄めかしている。
- 80 金璣衣食。黄金・宝玉・衣服。食物。しかし、食物以外は祈り出しても継母などの目を逃れて用いるのは極めて困難だったろうに。継母はろくに味な食べ物は与えなかつたろうから、こうした食べ物を祈って得たのは不自然ではないが。
- 81 翠紡。翡翠の羽で織った着物。カワセミは水辺に棲む小鳥で、羽の色が青く美しい。「翡」は雄で「翠」は雌。もつとも、（婦人部屋の象徴として文献に出る）「翡翠」「翠帳」はともに「カワセミの羽で飾った帳」と訳される（一説には「緑色の帳」）から、こども「翠紡」を「カワセミの雌の羽で織った着物」とまで取らないでよからう。いずれにせよ、極めて華麗にして豪華・珍奇な衣装である。想像の産物かも知れないが。（参考。「鶴髦」なる実在の衣服がある。これは道教の道士や学者などが纏う袖無し防寒着だが、普通「鶴の羽で織った着物」と説明される。晋代に流行したらしい。もつとも、鶴の羽だけでは織物にできまいから、布地に羽を織り込んだのであろうか。ただし、六朝、隋、唐以降も実際に鶴の羽が材料にされたかどうか。なお、色は白とまは限らない。道士の鶴髦の場合色は不定だが、「道徳のある者」（高位の道士）のそれは早衣（＝黒衣）だったとか。「三国志演義」（第五十二回など）に諸葛孔明が鶴髦を纏い車に乗って登場する場面があるのは有名）。
- 82 金の履。純金製の固い履き物ではないようだ。輪郭のはっきりした単純な事物を好む民話の世界ではこれでもよいのだが。前述の（とく、ペローの「サンドリヨン」では靴が「ガラス」verreか「銀栗鼠」（シベリア栗鼠）の毛皮「vat」かで論争があった（前掲注「verre」参照）が、ガラス製が民話的感觉に適合する。しかし（い）では後に「其の軽きこと毛の如く、石を履むに声無し」とある。

純金の糸でべた一面に刺繍が施された絹か皮革で拵えた履き物と考えればよい。ただし毛皮製とするのはおかしい。毛皮でできている履き物であれば多少足が大きくても履ける。

83 海島 南シナ海北部の大島海南島（かつて広東省に属し、現在は海南省）を想起させるが、なにせ民話のこと、そこまで考証するには当たらない。

84 其の左右 王の妃嬪・側妾。

85 乃ち是の履を以て之を道旁に棄て、即ち人家を遍歴して之を捕らえんとす 意味が通じない。ここから数句に誤字・脱字、あるいは脱文があるのかも知れない。論者は訳文において「すなわ」で文言を補い、いくらか脈絡を付けたが、この補足はもとより類推に過ぎない。大方のご高教が得られれば幸いである。

86 若に女の履く者有り この読み方は南方熊楠（「ここに、女の履く者あり」に従う。あるいは「若し女の履く者あらば」か。

87 其の母及び女 葉限の継母は葉限を虐待したので、こういう末路を迎えたとしても、「悪人への懲罰」を求めるのが一般的な民話の世界では妥当である。しかし、その実の娘（葉限の腹違いの妹）は原典の文面で見ると、特に悪役ではない。従って、論者が「こゝ」内で補ったように、偽者役を演じたのであろうか。その場合、いわば従犯として悪い母親ともども、物語の結びで処刑される羽目になるのはKHMにも類例があり、（現代日本人の感覚としては悼ましいが）民話として決して不自然ではない。

88 飛石の撃つ所となりて死す 衆人が受刑者に投石し、死に至らしめる公開処刑法は（少なくとも）中近東に見られる。新約聖書に、姦淫の罪を犯したとして捕らえられたこの女性をあなたはどうか処置するか、「モーセは律法に斯る者を石にて撃つべきことを我らに命じたるが」（新約聖書ヨハネ伝八章五節）と法律学者たちに問われたイエスが「なんじらの中罪なき者まづ石を擲て」（同七節）と答えた、とある。一方、中国唐代における公開処刑は、市での斬首だった、と思われる。このこともこの話が中近東方面からの移入では、と論者が類推する理由の一つである。ただしまことに雑駁な思いつきなので、識者のご示教を請う。

89 懊女塚 「苦しみ悶える女の塚」「辛い目に遭った女の塚」。

90 媒祀 供物を捧げて祀ること。

91 上婦 王の妃嬪の階級の一つであろう。その最高位か。「参考」「上卿」といえば周代の官制で臣下の内最高位の者を指す。

92 珠 真珠。

93 百斛 一斛（石）は十斗。一斗は十升。従って百斛は一八〇〇〇リットル。

94 徴卒 徴募した兵卒。

95 旧家人 元の召使い。

96

邕州^{ユウシュ} Yangzhou. 現在の広西省壮族自治区南寧市のあたり。唐代に設置された。唐代中国の南境にあり、現在はヴェトナムと国境を接する（南寧からヴェトナム国境まで僅か一六〇キロ）。南寧は邕江なる河の畔にある。邕江は西江に流れ込み、西江は更に珠江三角州に注ぐ。従って邕州は河川路で海洋（南シナ海）と繋がっていた。珠江三角州には古くから中国の南海貿易の中心都市であり、唐代半ば玄宗皇帝の開元二（七一四）年に中国史最初の市舶司（海上貿易関係を所管する官署）が置かれた広州 Guangzhou（現広東省広州市）がある。広州には唐代多くのイスラム教徒やユダヤ人が渡航、かつ定住していた（外国人居留地である「蕃坊」があった。この市域はある程度の自治を許されていたことだろう）。ちなみに、広州に較べれば遙か北方に位置するものの、長江下流（揚子江）と隋の煬帝が掘削させた大運河の交差点という要衝の地にあった揚州 Yangzhou（現江蘇省揚州市）には、隋末唐初、数万のイスラム系商人が居住していた由。揚州は唐代、淮南道の軍事・政治・経済の中心で、大都督府の所在地であり、産物の集積地、輸送中継地として栄え、江南（長江北岸に位置したので、厳密には「江南」と言い難いが）随一の繁華な大都会だった（その後五代十国の興亡に伴う戦乱により衰える）。こうして見れば、唐代にあつても既に、中国の長江以南は人口、産業ともに豊かで、諸都市では高度の文化が華やき、海上の道を経由して、近くは日本、朝鮮、東南アジア、遠くはインド、中近東との交流があつた。唐代以降もこの地、すなわち華南は、北方西方諸民族の侵攻ないし支配に悩まされることが多かった北中国、すなわち華北の大部分よりずっと安定した生活を享受し得た、と言えよう。

97

葉限^{エツケン}（シンデレラ物語の女主人公に固有名詞があるのは珍しい）この女主人公はまたシンデレラ物語ではお約束の綽名が付けられていないのである。綽名が実名、と思ひ違ひされて訛伝した可能性少なしとしない。「日本でも、「シンデレラ」「サンドリヨン」は女主人公の実名だ、と思ひ込んでいる向きがたくさんいるのではないかな。とは申せ、実名はついで挙げられてはいないので、まことに無理からぬことだが」。

ちなみに「葉限」と「灰」の音の関係を説く見解がある。「酉陽雜俎」の邦訳者今村与志雄によれば、楊憲益 Yang Xianyi の「中国の掃灰娘 Saohuaniang (Cinderella) 譚」（『零墨新箋』中華書局、一九四七）に、「葉限」Yexian（以上三箇所の拼音は論者が補った）は Aschen あるは Asan の訳音であらう、サンスクリット語では英語の「灰」ashes は Asan と成る、という趣旨の記事がある由。これは論者の管見に過ぎないが、Capeller's Sanskrit Dictionary (1891) によれば、英語「灰」ashes に当たるサンスクリット語として確かに Asa なる語がある。なるほど、Asan ないし Asa のずれにせよ、この音は「英語に酷似していることはともかく」現代中国の普通話による「葉限」の発音 Yexian と似ている（九世紀唐代の長安の住人だった段成式がどんな発音に「葉限」なる字を当てたのかは論者には調べようもないが）。しかし、こうした示唆は、この物語を南中国に招来した異国の商人や船乗りなどが、灰と密接な関係のある女主人公の綽名をその母語、あるいはその商人や船乗りなどが初めてこの物語を聴いた折耳底に

残ったどこやら他の国の言葉そのままでも伝えたのかも知れない、という貴重な着想だ、という程度に受け取っておけばよろしからう。

98 コンジ(豆っ子) 出典の物語では継子である女主人公のこの名前の由来は不明。しかし、他の朝鮮の類話「大豆っ子と小豆っ子」(Zaborowski, Hans-Jürgen. Übersetzt aus dem Koreanischen und herausgegeben von: *Märchen aus Korea*, Eugen Diederichs Verlag, Düsseldorf/Köln 1975, S. 57ff. [Nr. 27 Soja-Kerchen und Bohnen-Kerchen]) から察するに、継母に虐待され、ご飯のおかずは大豆汁だけというところから来ている。実子は美味しい小豆ご飯をあてがわれるので「パッジ」。ただし、物語によれば、大豆はとも栄養があるので、コンジは美しく、丈夫な乙女に育ち、小豆ご飯を食べているパッジは醜く、かよわかった、とある。

99 「コンジ(豆っ子)・パッジ(小豆っ子)」 崔仁鶴編著『朝鮮昔話百選』、日本放送出版協会、昭和四十九。

100 花靴「ソッコッシン」契小。婦人(や子ども)用の伝統的な朝鮮の履き物。金具や紐の無い欧米の婦人用短靴(英語「コート・シューズ」court shoes、米語「パンプス」pumps)に形状が似ている。多彩な刺繍が施されていて優美。現代韓国女性も韓服(チマ・チヨゴリ)を纏う折には足袋(ボソン)と花靴を履く。伝統文化では花靴の素材は絹地、刺繍の図柄は花。もともと現代では、「花靴」と称して販売されている、材料、図柄ともその限りではない。

101 「監察使」とも。李氏朝鮮において朝鮮八道(李王朝の置いた行政区画)のそれぞれを監察する従二品上はに当る官職名。国王直属。郡主など道の地方官(首都の官吏である「京官」に対して「外官」と称する)の上に立つ長官で、八道のそれぞれにおける最高権力者である。次官である都事の補佐を受け、水陸軍事面の長官である兵使・水使の協力の下、道の統治に従事した。例。「全羅監司」(全羅道監察使)「慶尚監司」(慶尚道監察使)。

102 ……足の横側を自ら包丁で削ぐ。このようにKHM二「灰かぶり」に酷似している。それだけに近代に日本を経由して朝鮮への流入があった可能性は否定できない。編者による採録が朝鮮がまだ日本統治下にあった一九四四年頃なので。しかし編者はこう述べている。

現在、このシンデレラ系の継子譚は、昔話よりも古代小説として、最も知られている。しかし、古くから各地方に伝承されているところからみると、かつて民間伝承の昔話をもとにして、それを小説化したものであろう。

中国から朝鮮へ伝播したものと考えるのも極めておもしろい。

103 おうふとはげせん「おうふ」の「お」は女子の名の前に付けて尊敬・親愛の気持ちなどを示す接頭辞だろうか。だとしても「うふ」

104 は分らない。「はげせん」も不明。むしろこちらの方が醜い綽名か、と思われるが。履物のモチーフ、日本では、美女が(脱ぎ落としたその小さい)履き物によって同定・発見される、というモチーフは存在し難い。ただし上古は別である。この時代には隋・唐代中国などからの舶載品、あるいはその模倣品である開放型ではない婦人用履き物があったはずだから(もとより庶民には無縁だったが。とまれ、帝——光仁天皇(在位七七〇—八一)——に神授された香と絵姿によって帝に見出され、その後となつた、という「吉祥姫」の伝承(出雲地方)に注目)。しかし降つては、日本の履き物は開放型だった、といえよう。厳密に言えば、公卿の儀式用の沓、蹴鞠に用いる沓、武者の毛沓、禪宗などの僧侶の沓、雪国の藁沓、じかに地面を踏む履き物としての革足袋や刺し子縫いの丈夫な布足袋はその限りではない。しかし妙齡の美女がかようなものを履くわけではないから、そこまで問題にするには当たらない。論者がここで指しているのは無論草履、下駄の類である。つまり、これらは履き物より足が多少大きくとも履くのにさして支障が無かった。江戸後期から昭和初期に掛けての江戸・東京の職人衆の雪駄文化に至つては、踵がちよいとはみ出るくらいのがよい、とされており、突っかけて履くもので、下ろし立ての紺足袋の踵が地面に触れ泥で汚れても、これを粹としたのである。

105 開敬吾編著『日本昔話大成』全十二巻、角川書店、昭和五十三年。同書第五巻、八九ページ以降。
沓『日本昔話大成』ではこの字が当てられているが、どんな履き物か不明。

106 ……嫁入りする。これまたKH M二「灰かぶり」に酷似している。KH Mが流入した近代に日本の民話らしく翻案された可能性も少なくなろう。しかし、朝鮮半島から伝播したものと考えられるとおもしろい。採録地は半島に近い、と言えるので。または、中近東から広州、寧波(浙江省寧波市。唐代の明州。室町時代日明交易の中国側拠点)と伝播して来た話を、勘合貿易に従事した者や、あるいは倭寇などが中継地あるいは根拠地の北九州、たとえば松浦、博多辺りに齎した、という可能性がなきにしもあらず。

107 『落窪物語』 所弘校注『落窪物語』(日本古典全書、朝日新聞社、昭和二十六初版)、藤井貞和校注『落窪物語』(新日本古典文学大系、岩波書店、一九八九)、室城秀之訳注『新版 落窪物語』上・下(角川ソフィア文庫、角川書店)など。

109 腹違いの姉妹たちである三の君と四の君。女主人公が左近少将に救出され、やがて少将の母である左大将の北の方と晴れて対面する折、「姫君は、げにただの人ならず、あてに気高くて、十二ばかり(傍点論者)におはしませば、まだいと若う、いはけなうをかしげなり」(巻之二)。所弘校注『落窪物語』二七〇ページ)とあるので驚倒させられる(なにしら「姫君」はこの時既に懐妊しているのである)。けれどもこの年齢はどうやら誤りで、本当は十七歳との設定。「四の君」はこの頃十四歳だったのだが、女主人公の三歳下である旨「巻の四」に明記されているので、いわく「四の君は」この北の方(「女主人公」)の三つが弟にて「後略」(前掲書三四八ページ)。「三の君」の年齢は実は不明だが、物語の発端から既に通婚しているため、女主人公より年上と仮定してみた。

そこで「姉妹」と表記しただい。「サンドリヨン」や「アッシエンブッテル（灰かぶり）」の場合、いずれも継母の連れ子は女主人公より年上という印象を与えるが、この物語ではそうではないわけ（また連れ子でもないが）。

110 日本の草履や下駄のようにほとんど開放型だと、これを履けることが所有者を同定するテストは成立し難い。それゆえ、こうした履き物が一般的だった、あるいは裸足が一般的だった地域では「シンデレラ」型民話は存在し難いはずである。「シンデレラ」は確かに世界の東西に広く分布しているが、それでも地域特殊型ではある（しかしながら時代によってはあり得る。前掲注「履物のモチーフ」参照）。

111 ……とてもこの種の物語の要因にはならない。A・B・ルート『シンデレラ・サイクル』第三章の内「履き物としてのスリッパないしサンダル」The slipper or sandal as foot-coveringの節。

結びに一言。

シンデレラ物語については既に一度、拙著『昔話の東と西 比較口承文芸論考』（国書刊行会、平成十六）の冒頭で「まえがきに代えて」「灰かぶり」「東西」と題し、一八ページに亘ってざっと論じたことがある。今回はそれを大幅に増補・改訂した。顧みるに、（下地もあつてのことだが）長年の教員生活でいつしか習い性となつてしまったお談義癖がなんとしても矯められず、注で恣に饒舌を振るっている。げにお恥ずかしい限りなり。

なお、「花靴」の注の一部（「伝統文化では花靴の素材は絹地、刺繍の図柄は花」）に加えて、「花靴」のハンゲル表記のローマ字入力法およびカタカナ表記については、人文学部日本文化学科の大野淳一教授からまことに懇切なご示教をたまわった（もとより、論者の逸脱、誤謬は大いにあり得る。注の記事が論者一個の責任に帰することはお断りするまでもない）。大野さん、どうもありがとうございました。

また、東京大学名誉教授大東文化大東文化大学教授蜂屋邦夫博士は、鶴髻に関する論者のあどけない質問に対し、少なからぬ典拠を添えて詳細なご回答を寄せてくださった。「翠紡」の注における論者の「参考」なる記述は、最後の

一行を除き、このお教えのまさに「氷山の一角」に過ぎない。蜂屋大兄、なにとぞご宥恕をたまわりますよう。